
空に向かって、撃つ

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に向かって、撃つ

【Nコード】

N7666E

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

高木と佐藤とコナンを中心にした事件もの。過去に起こった高木と当時の想い人を巻き込んだ殺人事件と、現在に起こった連続殺人の真相。オリキャラも含めた話です。苦手な方はご注意ください。

序章

人が撃たれた瞬間、あなたは何を思うだろうか。

しかも、最愛の人が目の前で撃たれたとするならば。

悲しみ？

絶望？

それとも怒り？

この刑事の場合、それは真実の存在だった。

ああそうか。

そういうことだったのか、と。

それは魂が抜けるような、喪失感を伴った悟りである。

いや、そんな陳腐なたとえでは収まりきらないかもしれない。

いくなれば、空から太陽が落つこちたような喪失感だ。

空にぽっかり穴が空く。
それくらいの大きさ。

突然空に穴が空いたら、あなたはどうか感じるだろうか？

一日目

そこまで暑くは無いが、じつと立ち止まっていたら汗が滲み出る程度の昼下がりに。

水族館を満喫した後、腹ごしらえで高木と佐藤はレストランに入った。

どこからどう見ても彼らは、恋人同士にしか見えない空気を醸し出している。

「イルカも可愛かったけど、やっぱりサメが一番可愛かったわね！あのとんがった牙がとくに。一撃必殺って感じ」

「そ、そうすね」

佐藤の少々一般人とはどこかずれた感覚に、はははと笑いながらも内心冷や汗を流す高木。

彼らは少ない休日を使ってデートを楽しんでいた。

オムライスを美味しそうに頬張る佐藤を見て、自然と彼の頬も緩む。

最近が高木の執念が勝ったのか、先輩刑事のデート妨害も少なくなっているのに余計に緩んでしまいうらしい。

が、そんな緩みっぱなしの頬が嫌でも引き締まる出来事は、未だに減らないわけで。

「あ、高木刑事と佐藤刑事だ！」

「げ」

子供特有の甲高い声のするほうを向くと、そこには阿笠率いる少年探偵団の姿があった。

世間は狭すぎやしないだろうか。

高木は心の中で首をうなだれた。

「あら、あなたたちもここで昼食なの？」

「ワシの友人がここの優待券をくれたのお。皆で来たんじゃよ」

にこにこ満面の笑みを浮かべる、博士と歩美と光彦と元太。

隣あたりを見回しているコナンや、欠伸をする哀は相変わらずこういったことには興味が無いらしい。

まあ、レストランが一緒だからと言って次の行き先までが同じわけじゃないし…、と思い直した高木は子供たちに問いかける。

「今日は平日だけど、学校はいいのかい？」

「創立記念日で休みなんですよ」

「平日にいったほうがレストランも空いてるしな！」

「ああ、なるほど」

光彦と元太が答える間に、隣のテーブルがウェイターによって拭かれ、「どうぞ」と促される。

自然の成り行きで五名が高木と佐藤の側に座ることになった。

一番端に座った哀が、隣のコナンにしか聞こえない程度に呟く。

「……やな予感がするわ」

「なんだよ、それ」

「あなたと刑事さん二人。いつものパターンよ、死神さん」

「おいおい」

ジト目で苦笑するコナン。

そんな毎回事件があったらたまったもんじゃない、と言いつ返す。

「さあどうかしら。でもまあ、仮に事件が起こったとしてもあの刑

事二人も事件体質だろうし、あなただけのせいじゃないかもしれないわね」

哀がほくそ笑みながら言うと、嘘でも本当に聞こえてくるから恐ろしい。

反論するだけ無駄だと、コナンはため息を一つついて探偵団と一緒にメニュー選びに専念することにした。

そしてその数十分後。

哀の、悪魔のささやきのごとき予感は的中することになる。

レストランの自動扉が開いた瞬間、外から悲鳴が聞こえたのだ。

悲鳴は一人ではなく大勢のように聞こえる。

その時コナンは、いつも事件が起こるときとは又違った、ぞわりとしたものを背筋に感じた。

きつと、悲鳴の先には死体があるだろう。

しかし、その予想が今の気持ち悪さの原因ではない気がした。

死体よりもっと、虚しくてやるせない感覚。

コナンは戸惑うが、すぐに振り払い立ち上がる。

道路に面した店だったので、反射的に高木や佐藤と一緒に店から飛び出した。

「どうしたの!？」

出入り口を出て、人が群がる斜め前のビルに駆け寄る。

佐藤が声を上げて、群集の一人に問うと「男が上から落ちてきた」と返って来た。

「警察よ! 現場に入らせてちょうだい!」

再び叫んで高木と共に群がる中心に突き進む。

コナンも二人の背を盾にして近づいていく。

そして。

血溜まりが出来たビルの真下にたどり着いた。

落ちたのはこのスーツを着た男のようだ。

仰向けになって、顔面が地面にべったりとくっついている。

佐藤がしゃがんで伺うと、後頭部のある一点に気がついた。

「銃で撃たれてるね」

「ええ」

同じく気付いたコナンが銃痕を見つめ、彼女が頷いた。

髪の毛でわかりにくいだが、確かに銃で撃たれた痕がある。

「では、ちよつと失礼するわよ」

常備していた白手袋をバッグから取り出し、慎重に男の顔を両手で地べたから横に向けた。

後頭部の痕がそのまま顔面に撃ち抜かれているか確認するためだ。

顔を表に向けたまま、佐藤とコナンは遺体の顔を見る。

落ちた衝撃で若干顔面が崩れているが、割と若い男のようだ。

「――須地？」

「え」

見知らぬ名前を呟く声が頭上からした。

遺体の顔を手で支えたまま、佐藤は驚いて隣の男を見上げる。

彼女の視線の先で、高木は呆然と立ちすくみ、額を撃ち抜かれた若い男の死に顔を見下ろしていた。

二日目、I

「殺されたのは須地卓也さん、二十六歳。政治家である父親の秘書をしています。死因は転落ではなく、拳銃の発砲。銃殺された後、あのビルの屋上から落とされたと見て間違いないでしょう」

「拳銃か……。で、犯人は直接ビルから被害者を落としたのかね？」
「いえ、あのビルには大型ゲームセンターが入っていました、屋上の柵にはたくさんのバルーンが吊るされていました。そのバルーンの一つに被害者が入っていたそうです。誰かが屋上の扉を開けると、扉と壁の狭間にセロハンテープでくっつけられた針付きのゴムが剥がれて、ゴムの繋がった先であるバルーンに針が刺さるという、仕掛けになっていたと考えられます」

「そのセロハンや針が見つかったているのか」

「はい。遺体を発見した後すぐに屋上に行ったら見つけました。ちなみに、転落の引き金となった扉を開けたのは、ゲームセンターの従業員です。電話で、くぐもった声の人物から「屋上に変なものがある」と通報を受けたので、屋上に行ったと証言しています」

「なるほど。以前毛利君と解決したあの画家の転落事件とトリックはよく似ているようだな」

佐藤の報告を聞いて、目暮が記憶を辿る。

このトリックを使えば、その場に居なくても遺体を落とすことが出来る。

死亡推定時刻は数日前なので、被害者を銃殺した後トリックを仕掛け、暫く経ってから遺体を落とした可能性が高い。

つまり、犯人のアリバイ崩しが難しいということだ。

警視庁内の会議室で目暮は、長引きそうな事件だ、とため息をついた。

昨日起こったこの事件は、その日中に現場急行した白鳥率いる刑

事達によって検証がされ、遺体の身元確認や転落のトリックを解明した後、こうやって目暮に報告されている。

「犯人の絞込みは出来ているのかね」

「それに関しては、まだ調査中です。裏の政治的なものが絡んでいるのかとも思いましたが、用意周到な計画殺人のようですので、交友関係により重点を置いて調べています。……しかし」

ホワイトボードの隣に立っていた書記係の佐藤に代わって、白鳥が長机に広げられた資料を手にとって答える。

そして、ちらりと彼女のほづを伺うように見た。

何かを躊躇っているようだ。

「しかし、どうしたんだ？」

目暮がいぶかしむ。

その問いに答えたのは、今度は白鳥ではなく佐藤だった。

「その被害者と、高木君が知り合いかもしれないそうです」

「何？」

昨日、遺体を見てその名を呟いた高木。

佐藤が知り合いかと聞くと、「多分、須地卓也という人です」と彼は言った。

「一体どういった知り合いなんだね」

「それに関しては、流石に彼も知り合いの遺体を見て驚いたようなので、今日所轄への用事を済ませてから、詳しくここで聞く予定になっています。あ、でも最低限のことは答えてくれますよ。確か大学時代の——」

彼女の答えを引き継いで、躊躇いを消した白鳥が手帳をぺらりとめくる。

その時、机に置いていた彼女の携帯が振動した。

すぐに手に取ってディスプレイを見ると、「千葉」の文字。

前から予定に入っていた米花署への雑多な用事を済ませるべく、高木と共にこの場にはいなかった彼だ。

「もしもし、千葉君？ 確かあなた高木君と米花署にいらんだっかわよね」

「そ、それが……さつき110番で近所の病院から人が死んでいるという通報があつて、一緒に行つたんです」

「また死体が？」

「しかも、同じく銃殺です。この病院に勤める女医だそうですが、その……」

「何？ どうしたのよ？」

佐藤は嫌な予感を覚える。

言葉を濁す千葉からは、先ほどの白鳥と同じような躊躇い。

すると、携帯の向こう側で「代わってくれ」という慣れ親しんだ声がした。

「もしもし、佐藤さんですか？」

「高木君！ 一体そこで何が起こっているの」

「詳しいことは後で伝えます。それよりも、大至急調べて欲しい人物が数人居るので目暮警部に伝えてください」

「犯人がわかつたっていうの？」

「……いえ、被害者にもなり得る人たちです」
「何ですって」

事件の概要がつかめず、佐藤は頭の整理が追いつかない。

そんな彼女の空気を悟ったのか、高木は一呼吸置いてからこう言った。

「被害者は香川麗子、二十七歳。須地や僕と共に、留学先のアメリカの大学で同じゼミ生だった人です」

二日目、II

六年前。

二十歳だった高木は小さな島国ではなく、我々こそが世界の中心だと誇るような国の空の下に立っていた。

日本の私立大学に入学した後、元々語学に興味があったこともあり、アメリカの大学に留学したのだ。

自分の通う大学と提携している所だったので、単位を取ればそのまま日本の大学の単位とあわせることが出来る。

彼は休学をせずに留学することが可能だった。

留学先の大学では寮に入って、他の日本人学生たちと仲良くなった。

日系アメリカ人の教授が開いているゼミに所属し、そこで知り合った友人が大半だった。

一年間の勉強を終えて、帰国するまでに作った日本人の友人達。

回生が違い、帰国する時期が皆ばらばらだったため、その後はほとんどの友人達と疎遠になったという。

その中に、昨日今日と殺された須地や香川もいたのである。

「……そう、高木君留学していたのね。そういえば、ロス市警へ犯人の身柄引き渡しを行うために出張したこともあったし、英語堪能なのねえ」

「と言っても、一年間だけですけどね。それくらいの人ならいっぱいいますし、他のゼミ生達の中には四年間ずっと在学した人もいましたし」

米花病院に直行した目暮達は現場検証をしていた。

被害者の遺体は病院内の大きな庭の植え込みに隠れるようにして置かれている。

朝に見回りに来た警備員が見つけて、警察に通報したらしい。

被害者の名は香川麗子。この病院で勤務していた女医だ。

生前は美しい顔立ちだったのだろう。

白目をむいた瞳のせいで、長いまつげとアイシャドウが台無しになっっているのがもったいないと、千葉はため息をついた。

死亡推定時刻は昨日。

深夜に帰宅するところを、銃で殺されたと考えられている。

鑑識が現場を調べてる間に、佐藤は高木から今回の被害者との関係についてやっと詳しく聞けた。

そして先ほどの会話があるわけだが、高木の苦笑に佐藤は笑い返すことが出来ない。

彼の過去を今まで知ってそうで知らなかったことに、内心複雑だったからだ。

とはいえ、それは現在一番重要なことではない。

頭を切り替えて顔を引き締める。

「ところで貴方に頼まれていた、他の日本人ゼミ生達の居場所わかったわよ。海外に一名、他府県に一名、都内に四名が住んでいるわ。所轄に連絡して、本人達には気付かれないように一応張り込みを頼んだから」

「ありがとうございます。僕の取り越し苦労になればいいんですけど……」

「そう、ね」

連続して銃殺された被害者の共通点が同じ大学のゼミ生だということしかないとすれば、他のゼミ生達にも何か被害があるかもしれない。

そう考えてしまうのは必然だろう。

高木を気遣って、佐藤は労わるようにその肩にぱんと手をかけた。

「大丈夫。貴方のおかげで被害者の共通点が見つかって早急に張り込みが出来たんだし、被害はもう起こらないわよ。後は犯人を探し出すだけ。がんばりましょう」

「はい」

佐藤が好きな、彼の笑顔がそこに浮かんだ。

人の良さそうな穏やかな顔だ。

しかし、いつもならそこで安心するのだが、この状況でその顔が出来ることに一瞬違和感を覚える。

「佐藤さん？　どうかしましたか？」

彼女が急に黙り込んだため、逆に高木が心配する。

はっとして、首を横に振った。

「いえ、なんでもないわ。それより、貴方も気をつけるのよ。貴方だってそのゼミ生の一人には違いないんだから」

「……そうですね」

いくら刑事とは言え、狙われないとは限られない。

犯人の目的がいまだわからない以上、最大限の警戒をしなくてはならないのだ。

恐らく今日中に捜査本部が米花署に立ち上がるだろう。

「じゃあ、現場検証が終わったら被害者の周りの交友関係を改めて調べましょう。殺害の時間にアリバイの無かった人が居るかどうか確認しないかね」

彼女の言葉に高木も力強く頷く。
その後、すぐに千葉から鑑識が終わったという知らせが入り検証に入ることになる。

実はこの会話の間、彼らはわかっていて言わなかった事実があった。

佐藤が言わないようにしていたので、高木も敢えて口には出さなかったのだろつ。

被害者の共通点が同じゼミ生。

つまり、被害者と接点のあると思われる犯人も、そのゼミ出身と言つ可能性が高いということである。

二日目、IIII

被害者二名に共通する知り合いを調べたところ、なんとあのゼミ出身で都内にいる四名全員にアリバイが無かった。

現在は張り込みがされているが、この四名に妙な動きはない。名前と年齢と職業を順に並べると、

相内透、二十七歳、税理士
斉藤直、二十八歳、弁護士
梨本和文、二十九歳、検事
西野誠司、二十五歳、医師

この四名が、被害者にも加害者にもなり得る人物だった。

「みんな、結構資格持ちのエリートよね。殺された須地さんは政治家秘書だし、香川さんも医者だし」

「あのゼミは法学を専門に教える教授が開いてたんですよ。だから、エリートというより法律関係の仕事につきたい学生が大半を占めたんでしょね」

香川麗子の遺体があった病院から出た佐藤は高木の運転するスライインで、西野誠司が働いている杯戸中央病院に向かっていた。助手席の窓から見える正午近くの空は、太陽が最も高い位置にさしかかり眩しさを増している。

先ほどの病院での現場検証の後、目暮は二人にこれからの捜査方法について説明した。

犯人の目的がわからない状態で警察に呼び出して、任意の事情聴取を受けさせることは躊躇われる。

まずこちらから出向いてそれとなく様子を伺ってみたほうがボロ

が出るかもしれない、と。

全員の知り合いである高木は、その任務に就く佐藤のサポートに回された。

「西野さんとは仲が良かったの？」

「ええ、ゼミの中では一番親しかったですよ。僕より一つ年下で、よく懐いてくれました。彼とはたまにメールでやりとりもしますし」「そうなんだ。でも、他のゼミ生達とは連絡とって無かったのよね。帰国時期がばらばらだったとかで」

「はい。それに、皆職業柄忙しい人たちばかりですから。若いうちは勉強の日々なんだと思いますよ」

「ま、それは貴方にも言えることね」

「……肝に銘じておきます」

遠まわしに、貴方も勉強しないとねと言う佐藤に高木が苦笑する。そうこうしている内に、目的の病院に着く。

あらかじめ連絡してあったので、受付に身分を伝えるとすぐに白衣を身につけた西野がやってきた。

短めに切られた髪の毛をワックスで立たせ、こざっぱりとした印象を与える好青年だ。

高木を見つけるとすぐに走り寄って来た。

院内で走るのは禁止のはずだが、久方の再会で嬉しいようだ。

「涉さん！ お久しぶりです」

「久しぶり。悪いな、忙しい中呼び出してしまつて」

「いえ、涉さんこうやって直接会うのも何年ぶりかですし。そちらの方は？」

「佐藤美和子さん。僕の先輩に当たる人だよ」

「佐藤です。よろしく」

紹介にあわせて、佐藤も軽く会釈する。

美人にっこり笑いかけられて、西野は照れる。

「こんな綺麗な人が先輩だなんて羨ましいっすね」

「あはは。……で、悪いんだけど早速本題に入りたいんだ」

「ああ、そうでした。俺、昼食時間を使って涉さんの話を聞くつもりだったんで、庭で弁当食べながら話してもらってもいいですか」

「いいよ。昼食時間まで割いてもらってホントごめんね」

そこまで気にしなくてもいい、と西野が頭を振って二人を庭のベンチが置いてあるところまで案内する。

病院を囲うように庭があり、いつも場所が決まってるのか、迷うことなく西野は大木の側のベンチまで進んでいく。

刑事二人がその後についていった。

西野も彼らも、和やかな会話の割りに顔が少々こわばっている。何せ、これは殺人事件の捜査なのだから。

その三人を、上階の病室から見下ろす外国人の男の目があった。偶然庭を見たら、「彼」の姿を見つけたので息を飲んだ。

——まさか……

「ジェイムズさん？　どうしたの？」

水無の様子を伺いに来ていたコナンは、窓から下を凝視しているジェイムズを不審に思い声をかける。

返事が無いので、そのまま彼の視線の先をコナンも見る。

「あ、高木刑事と佐藤刑事だ」

「刑事……！ 彼を知っているのかね」

「え？ うん、いつもお世話になっている刑事さんだよ。多分、昨日今日と起こってる殺人事件の捜査で来てるんじゃないかなあ。ジエームズさんこそ、高木刑事を知ってるの？」

パンダカーの事件でぎりぎり入れ違いになったくらいのはずだが、それ以外に接点は無かったように思い、コナンは首をかしげる。

「……ああ、恐らく」

躊躇うように、しかしジエームズは頷くとカーテンを閉めた。

これ以上凝視していたら、一般人ならともかく刑事には気付かれてしまうだろう。

「帰国していたとは知っていたが、まさかこんなところで見るとは思わなかったよ。しかも、刑事になってるとは」

「どういうこと？」

彼は一瞬黙って、しかし次にこう答えた。

「少し精悍な顔つきになったようだが、彼は私がアメリカで会った青年に間違いない。——六年前の、ある大学で起こった殺人事件の時のことだ」

「何だって」

あの時の悲劇を思い出して、ジエームズは深いため息をついた。

二日目、I V

澄み渡る空。

目に染みるほど透き通る青。

そんな色には不似合いな、英語と日本語が混ざり合った大声。

柵の無い屋上の一番端に、彼女は立った。

追いかけてきた者達が口々にやめろ、思いなおせ、と叫ぶ。

しかし彼女は、もう後一步下がれば数メートル下のコンクリートしかない、ぎりぎりのところで立ち止まったまま。

彼女と友人の若者達が思わず駆け寄ろうとするが、それは大人たちによって抑えられた。

止められながらも叫ぶ若者達を見て、彼女は一瞬目を閉じる。
そして、次に目を開けると手に持っていた「それ」をこめかみに当てた。

「やめろ雪乃！」

「……ごめんね渉…弱い自分で……ごめんね…」

銃声と彼女の名を叫ぶ声が、同時に空にこだました。

「高木君？ どうしたの？」

高木ははっとして佐藤のほうを向いた。

西野への聴取を終えて、他の容疑者達のところへ向かう車の中でのことだ。

声をかけても、ずっと赤信号を見つめたままの彼に佐藤は不審がった。

「ああ、すみません。ちょっと考え事をしていて」

「そう。……辛かったなら、あとの聴取は私だけでするわよ？ 目暮警部はあなたを指名していたけど、別に強制じゃないんだから」

刑事が知り合いを容疑者として聴取する。
それは良くない時と別に良い場合がある。
目暮は後者を取ったようだが、佐藤は彼の心労を考え提案した。

「いえ、大丈夫です。それより、西野の時と同じように、次に会う
斉藤直について今のうちにどんな人が説明しておきます」

しかし、考え事がいつもより多そうなことを除けば、態度に変化
があるわけではない。

取り乱すことなく、私情を挟まず通常の勤務をこなしている。
彼にやる気があるのなら、そこまで心境を伺う必要は無いだろう。
恐らく最も高木のことに敏感な佐藤は、そう判断してメモ帳を取
り出した。

——あまり、第三者のこちらが気にし過ぎるのも悪いわよね。父や
松田君の時の私がそうだったし。

「斉藤直、二十八歳、弁護士。僕らが所属していたゼミのゼミ長を
やっています」

「えーと、ゼミ長ね。はい続けて」

斉藤に関するデータを書き込みながら、彼女は敢えてその行為に
神経を集中させる。

「どちらかといえば神経質なほうだったと思います」
「うんうん」

その判断が高木ではなく、実は自分自身のためだったと気付くの

は、そう遠くない将来のことである。

二日目、V

捜査本部が立ち上がった米花署内で、殺害現場の写真を見ていた目暮のところに、白鳥が白い紙を持ってやって来た。

「目暮警部、佐藤さんから報告来ました。西野誠司に変わった様子は無かったということです。昨日殺された須地さんの死亡推定時刻、一昨日の深夜二時頃には一人暮らしの部屋でもう寝ていたこと、香川さんが殺された昨日の深夜二十四時頃には既に病院の当直だったそうです。しかし、香川さんのいた米花病院とは距離的にも近いので、休憩時間を使って向かうことは可能。つまり、アリバイらしいアリバイは無いと言う事ですね」

目暮が重々しくうなずく。

「そうか、わかった。引き続き君は、被害者の殺害日の行動の調査にあたってくれ」

「わかりました。……あの、彼女達だけに回らせるのではなく、他の捜査員にも手分けして聴取に当たらせたいほうが早くないですか？ 高木君が容疑者達の知り合いだから、話しやすいということ担当にしたのはわかりますけど、それにしても容疑者が複数居るのであればやはりこちらでも複数で回ったほうが」

白鳥は遠慮がちに問う。

彼は普段大ベテランの上司の捜査方針に異を唱えないほうだが、今回はどうしても気になったらしい。

しかし、その気持ちがあわっているはずの目暮は、それでも首をゆっくり横に振った。

「いや、最初の聴取だけは二人に任せればいい。連日で二人も殺しているのだからな。本当にあの中に犯人が居るのであれば、刺激しない程度で捜査するのが無難だ。それに……」

「それに？」

「まあ、私にも色々考えるところがあるんだよ。今は大目に見てくれ」

複雑そうな顔で珍しく何かを含んだ言い方をする目暮に、白鳥はそのまま頷くことしかできなかった。

それ以上意見することが憚られるような空気ではなかった。

後ろから別の捜査員が報告に来たので、軽くお辞儀をして踵を返す。

——この事件、もしやもつと複雑なものが絡んでいるのか？

机に戻りながら白鳥は内心勘ぐる。

白か黒かはつきりとさせるタイプの上司が、あれだけ慎重になっているのだ。

連続殺人とは言え、その態度には疑問が残る。

そしてもう一つ、更に気にかかることが彼にはあった。

「そもそも、犯人の目的は一体何なんだ……」

被害者達に最近これといったトラブルは無かったし、犯行声明も無い。

ただ殺人と言う事実だけがここにある。

彼は一人呟いて、ため息をついた。

一方、佐藤と高木は斉藤直との待ち合わせ場所に向かっていた。運転を代わってもらった高木は、携帯で誰かと話している。

「え、三人一緒に？——いや、それは構わないよ。互いに手間も省けるし。場所は……うん、わかった。じゃあ今からそっちに向かわせてもらおうよ」

その後、謝意を伝えて電話を切った。

「三人一緒に聞きに行くの？」

「はい、直が相内透と梨本和文に掛け合ってくれたそうです。直は弁護士で、和は税理士、和文は検事ですからね。受け持つてる仕事がいかに今高裁に関係していて、高裁の近所のカフェなら三人とも今から行けるとかで。勝手に決めてしまいましたけど、良かったですか？」

「ええいいわよ、まだ任意の状態だし。高裁のほうがここから近いしね。次の信号が青になったら方向転換するわ。あ、一応本部にこのこと伝えて」

「わかりました」

再び携帯をぱちんと開けて目暮の電話番号をリダイヤルする。向こうも忙しいのか、中々繋がらない。

「……佐藤さん」

呼び出し音が続く中、高木はぽつりと呼ぶ。

「ん、何？ 繋がらないの？」

「いえ、そうではなくて……さっき西野に会って、どう思いましたか？」

佐藤はその真意がつかめず、彼のほうを見る。

彼は携帯を耳に当てたままじっと赤信号を見つめていた。

そういえば先ほども高木は赤信号を眺めていたことを思い出し、佐藤は胸騒ぎを覚える。

しかしそれは口には出さず、聞かれたことにだけ正直に感想を述べた。

「そうねえ。とても素直で良い人だと思ったわ。同じゼミ生が殺されたことに悲しんで、他のゼミ生の事も心配して。容疑者になりかけていると薄々気付いていながらも、貴方に協力するためにアリバイの有無を話してくれた気がするわ。——あとは……」

そこで一旦切って、次の言葉を躊躇った。

繋がらない電話を諦めて、携帯を閉じた高木は佐藤の発言を待つ。彼の視線を受けた彼女が口を開くまでに、そう時間はかからなかった。

「あとは、貴方のことをずっと気にしていたことが一番印象に残ったわ。被害者よりも他のゼミ生よりも、貴方のことを気にかけていた。別れ間際、「大丈夫ですか」って恐る恐る貴方に聞いてきたしね」

「そうですか」

だが彼女はそれに関して聞こうとはしなかった。

何故西野が高木を心配したのか、聞くとすれば今は最もタイミングのいい頃合だったが。

それでも彼女は聞かなかった。

その意味を察している高木は、手元の携帯を握り締める。

唐突に流れる沈黙の中、青信号に変わったため彼女がハンドルを横に切る。

と、同時に彼の携帯が振動した。

受信に気付いた目暮から折り返しかかってきたようだ。

「佐藤さん。着いたらまだ時間があるでしょうし、少し僕の話聞いてもらっても良いですか」

「……それは、事件に関係することかしら」

「ええ。最も根本的なことに関係するかもしれないことです」

彼は意を決したように、応答すべく再び携帯を開いた。

二日目、V I

目的の高裁近くのカフェに着いた佐藤と高木は、外を見れるガラス側の丸テーブルについた。

ボックス席だとあとから三人来れば手狭になると判断したためだ。ちょうど昼食が終わる頃に着たので、クラシクの流れる店内に客はちらほらとしかない。

「話がある」と言ってから終始無言だった彼らは、腰を下ろして向かい合った。

白いテーブルの上には水の入った二つのグラス。
それを一口飲んでから、高木は口を開いた。

「最初に、今から話すことをこれまでいわなかった理由を述べさせてください」

「ええ、いいわよ」

「今回の事件に関わっている可能性が非常に高いのはわかってました。……ですが、それを言うには僕の気持ちの整理が追いついていませんでした。それに、上層部の人間は知っていることだったので僕が同僚に言わなくても指揮官がわかっているのであれば初動捜査に差し支えは無かったです」

さすがに支障が出ることであれば最初から言っていた。
そういうことらしい。

「じゃあ目暮警部は知っているの」

「ええ。警視庁の配属されるときに、履歴は上司である警部に伝わるんで。警部は今回のことについて、「同僚には必要だと思ったときに言ってくれ、上はもう把握している事実だから捜査に支障は無

い」とおっしゃってくれました」

香川麗子の殺害を警視庁に伝えた後、捜査一課が現場に向かう間に電話で目暮が自分に気遣ってくれたと言う。

「つまり、今がその必要な時だ？」

「はい。今から会う三人と話をしていくうちに必ず出てくる話題でしょうし……それに、貴女は僕が黙っていることに気づいていて、敢えて話す機会を待っていてくれましたし」

この事件があるまで彼らには無かった、目に見えないわだかまりのようなもの。

辛いはずなのに彼女は耐えてくれた。

だからこそ、言わなければならぬ。

「どうやって話そうか、車の中で考えました。そして、考えれば考えるほど、全て話さなくては真実にたどり着かないことがわかりました」

ひざの上に乘せた両手に思わず力がこもる。

佐藤はぎゅっとスカートをつかんだ。

今から知ること、どれだけの彼が詰まっているのだろうか。

「——今回殺された須地と香川。僕の依頼で居場所を探してもらった、容疑者の四人と今回は部外者だと思われる東京以外の二名。そして僕。計九名が六年前アメリカの大学で同じゼミだったことはもう知ってますよね。きつと佐藤さんなら、そこで何かがあったことも感じていると思います」

肯定も否定も示さず、彼女は話す彼をじっと見つめる。

「そのゼミの教授の名はカールス・モトキ。日系三世で日本語も堪能なことから、自然と日本人学生が集まったんです。そして6年前集まった日本人学生は十名。先ほど言った九名以外に、あの時はもう一人いました」

テーブルの上でグラスを両手で握り、揺れる小さな水面を見下ろした。

「桐生雪乃。当時二十一歳。僕より一つ年上で、互いに好感を持っていました。多分、付き合っていたと思います」

好感、という二文字にも彼女は取り乱さなかった。

文字通り腰をすえて冷静に聞こうとしていたが、「多分」という言葉には若干怪訝な顔をする。

それを察して高木は付け足す。

「同時期に寮に入った僕たちはすぐに気が合い、恋愛感情を抱くまでそう時間はかかりませんでした。ただ、正式に面と向かって気持ちを伝える機会を何となく逃してたんです」

もう一度、彼は水を飲んだ。

「それでも理想的な学生生活を送っていました。西野を含め、同じ勉学に励む仲間と、その方面では高名なカールス。そして雪乃。良い人間関係を築いて僕はとても楽しかったです」

グラスを置き、昨日今日と殺された仲間との記憶を呼び戻しながら、彼は淡々と話す。

「そんな日々が一年になろうとした初夏のことでした。僕は一年間の短期留学が終わる前に、彼女にちゃんと正式な付き合いを申し込もうと矢先のことだったんです。殺人事件が、起こったのは」

その後が続く言葉を予期して、佐藤はつばを飲み込んだ。

さっき、彼は桐生雪乃について「当時二十一歳」と言った。

更に、親しかった西野が彼に「大丈夫ですか」と心配している。

だからきつと、高木と思いを寄せ合ってた彼女は。

「殺されたのは教授のカールス。そして殺したのが、……雪乃でした」

——なんですって

被害者が雪乃だと思っていた佐藤に、声にならない驚きが襲う。

丁度店内に流れる「亡き王女のためのパヴァーヌ」は、まるでその凄惨な過去を表すかのようだった。

しかし今の彼女には、そんな悲しくも美しい音色すら聞こえていなかった。

二日目、「六年前」

大学の宿泊施設でゼミ合宿を行っていた最中、事件は起こった。一年の締めくくりの意味も込めた一泊二日の予定で、夕方までは彼らはディベートや論文発表をしていた。

そして夜、近くのバーで飲んだ後施設に戻って寝静まった。

次の朝。

予定時刻になっても教室にカールス教授が現れない。

不審に思つて、ゼミ長の斉藤直と副ゼミ長の桐生雪乃が彼の部屋に向かった。

そして二人は、頭を撃たれた状態でベッドの上で倒れている教授を発見することになる。

通報で警察が来たが、死亡推定時刻が夜中だったこと、その日に宿泊していたのは彼らのゼミだけだったことから、犯人がゼミ生の中にいることは明白で。

一通り全員の聴取が行われたが、自白するものはいなかった。物証で見つけるしかない、警察は凶器の拳銃の搜索に取り掛かる。

高木が後日再び聞き取りで警察に行った。

彼には死亡推定時刻に、コンビニにジュースを買いに行っているというアリバイが証明されたばかりだ。

なので、他のゼミ生のことを調べるための参考として呼ばれたのである。

雪乃や斉藤、須地、香川達が容疑者として聴取をされた後、入れ違いに地元の警察署に入った。

その聞き取りの最中、もう一つの惨劇が起こる。

聞き取りがされている部屋に、あわただしく一人の刑事が入って

きて、こう言ったのだ。

「容疑者の一人が拳銃を持っていきなり屋上に行った」と。

高木のほかに、違う部屋で聴取をされていた西野、相内、梨本らも加わって刑事達と一緒に屋上へ向かった。

駆け上がった先にいたのは、雪乃。

屋上の一番端に立っている。

息を切らしながら、肩を上下させて右手には拳銃が握られていた。雲ひとつ無い空とまばゆい太陽の光を背に立つには、あまりにも不似合いな姿。

彼女は屋上にやってきた刑事やゼミ生の中に高木をちらりと見た後、高らかに言った。

「私がこの拳銃で教授を殺しました」

そこにいた全員が動揺する。

西野達も青ざめた顔で彼女を見つめる。

「前から教授に性的関係を迫られて……断れば、大学に働きかけて来年の私の奨学金を打ち切ると言われてました。どちらも嫌だった私は、返答が近づいたゼミ合宿の夜に、耐えられなくなって、彼の部屋に元々あった拳銃で咄嗟に撃って——」

「嘘だ!!」

高木が思わず叫ぶ。

彼女の元へ寄ろうとするが、それは周りの刑事達によって抑えられる。

拳銃を持っているのだ。いつ彼女が発砲してもおかしくない。放せと怒鳴る彼を見て、雪乃は悲しそうな笑顔を浮かべた。

「殺した当初、犯人だとばれない限りずっと黙っているつもりでした。でも、そのせいでみんなが疑われることになると後で気付いて後悔しました。……だから証拠を持って自首をして、それから、」

彼女はすつと後ろに下がった。

もう半歩後ろに行けば、床は無い。

六階建ての警察署の周りには硬いコンクリートがあるだけ。

飛び降りる気だと悟った刑事が「思い直せ」と叫ぶ。

西野達もはつとして「落ち着いてください」「死ぬな」と言い近づこうとしたが、高木同様刑事達につかまれた。

止められながらも叫ぶ若者達を他人事のように眺めて、彼女は一瞬目を閉じる。

ゆっくりと、息を吸う。

そして、次に目を開けると手に持っていた「それ」を自分のこめかみに当てた。

「やめろ雪乃！」

「……ごめんね……弱い自分で……ごめんね……」

震え声と共に、流れた一筋の涙が彼女の頬を伝う。

次の瞬間高木の目に映ったのは、頭を打ちぬき屋上から落ちる、想い人の真っ赤な血だった。

二日目、VII

高木と思いを寄せ合っていた女性が、殺人を起こした後自らの命も絶った。

想像を上回る事実佐藤は、どういっていいのかわからず、黙っていることしか出来なかった。

戸惑いというものは少し違う。

驚きにも近いがそうではない。

言うなれば、突然もやの中に放り出されてしまったような。

一方の高木は、本当に過去を過去として認識しているのか、淡々と続ける。

「その後の調べで、教授が本当に雪乃に言い寄っていたことが判明しました。僕は気付けませんでしたが……今日会う三人などは知っていたそうです。言い寄る場面を偶然目撃して、後で雪乃にどういふことが聞いたところ「心配しなくて大丈夫、涉にだけは絶対言わないで」と口止めをされたと教えられました。そして警察は、奨学金の期間である一年より前に、何らかの形で決着をつけようとしていたのではないかと推測を立てました」

殺害動機が存在と証拠と自白。

自殺は唐突だったが、彼女の殺人は疑いようの無い事実だと警察は判断した。

「教授と仲間が死んで、残された僕達は気まずい形で大学を去りました。その後連絡を進んで取り合わなかったのは帰国時期が違ったせいであることも事実ですが、それ以上に二人の死が大きく影響していたと思います。皆は特に、雪乃と親密だった僕には会いにくかったでしょうね。」

殺人者と最も親しかった人間と会う。

しかも、殺人の動機を知っていたのにも関わらず言わなかったのだ。

会うのに躊躇いができるのは、容易に想像できる。

今日容疑者三名が同時に集まることになったのも、もしかして一人で高木に会うことに引け目があったのではないだろうか、佐藤はその時気付いた。

そして高木自身もそんな彼らの心情を汲み取ったからこそ、渋ることなく三人同時の事情聴取を受け入れたのだろうと。

「あれからもう六年がたちます。……まさか、殺人事件で疎遠になった仲間が再び殺人事件によって集まることになるとは、皮肉なものです」

彼はそう言って、グラスの水を一口飲む。

この話の中で彼は何度も水を口にした。つまり、いつもより呼吸数が多いということだ。

それだけ心労が積み重なった内容だったのだろう。

何度か手にしたグラスをもう一度置き、佐藤のほうに向き直った。

「——佐藤さん」

寂しげな顔をして、頭を下げる。

「こんな大事なこと、今まで黙っててすみませんでした」

こんな大事な事、というのは事件における大事なことが。それとも、恋人としてのことが。

どちらとも受け取れる謝罪に、彼女は案外早くかぶりをふった。

「謝ることじゃないわ。私だって貴方に松田君のこと話さなかったし。……貴方を想う者としてなら、今の話は驚いたけど逆にもっと貴方のことを知りたいと思ったわ。そして刑事としてなら、とても事件の参考になったわ。——勇気を出して話してくれて、ありがとう」

拒否されるどころか、お礼を言われたことが予想外だったのだらう。

頭を上げてと言う彼女に、彼は少し戸惑った様に姿勢を戻す。

「あ、あの……」

「何をおびえているのよ。私達は今までいろんなことを共有してきたじゃない。貴方が私を受け入れてくれたように、私も貴方を受け入れているわ。その覚悟は、過去の出来事で揺らぐほどやわじやないの」

そして、一呼吸置いて。

「私が人を好きになるのって相当なことなんですからね？」

教師が生徒に言い聞かせるように、佐藤は彼にふふつと笑いかけた。

その笑顔に彼の肩から緊張が抜けていくのがわかる。

彼は、ありがとうございます、と嬉しさ半分安心半分の礼をした。

「やっぱり貴方には憂い顔よりそういう優しい笑顔が似合うわ。さ、もうすぐ三人が来る時間よ。犯人も動機もわかっている過去の事件と今回の事件にどういったつながりがあるのかはわからないけど、頭を銃で撃つという共通点がある以上関連性は高いと言えるわね。」

慎重に聞き取りしましょう
「はい」

そして同時にドアが開くベルの音が店内に軽やかに響いた。

二日目、VII

時間ちようどにやってきた弁護士の斉藤、税理士の相内、検事の梨本は席に着いた当初ぎこちない感じだった。

久しぶりに会う高木に、過去に対する引け目があったのだろう。

何せ、彼らは事件の発端となった教授が雪乃に迫ってたことを知っていて、彼女に頼まれるまま何もしなかったのだ。

三人とも仕事柄スーツを着ていたが、気分的なものなのか、佐藤には窮屈そうに見えた。

しかし、再会した高木はにこやかに挨拶をして話しかけてきた。

「刑事になった時点で、踏ん切りはついているから」と付け加えて。

彼の調子に合わせるようにして、三人は段々今思っていることを話し始めた。

今回の事件と六年前の事件は確かに何も関係が無いとは思えない、被害者の二人とは仕事の関係で数回会ったことはある、二人の死に相当なショックを受けた、など三人それぞれが戸惑いがちに言った。

佐藤が昨日一昨日の行動を彼らに聞くと、ずっと自分の事務所で仕事をしていたと返ってくる。

公の場に出ることは無く、事務所でデスクワークを続け、思い思いの時間に休憩を取っていた、と。

つまり、被害者を殺せる機会はあるわけだ。

そこまでは佐藤も高木も口に出して言わなかったが、斉藤が肩をすくめてこう言った。

「やっぱ俺たちは疑われてるんだろうな、涉。被害者二人の共通の知人で、しかも過去には同じ仲間内で人が死んでいる。これで疑われないほうがおかしい」

隣に座る相内と梨本も予想していた考えだったのか、驚かず神妙に刑事二人を見つめている。

斉藤はめがねのフレームをくいと上げる。

七三分けの前髪は眼鏡にかからない程度の絶妙の位置だ。

神経質、という高木の評に違わぬなりだった。

ぱりつとアイロンのかかったグレーのスーツを着た斉藤は続ける。

「そして、渉の言うところによると殺人の目的がまだわかってない。つまりこれから再び殺しがある可能性もあるわけだ。すると、殺される標的はまた俺たちになるかもしれない。俺たちは容疑者であり、被害者にもなりえる人物。だから俺たちをよく知っているお前が聞き取りに来た——ってとこだろ？」

さすが弁護士である。

疑いがかけられているにもかかわらず、怒らずにその事実を冷静に受け止めているようだ。

彼の言っていることは本当だったので、高木は少し迷ったあと「そのとおりさ」と肯定した。

「そういえば、六年前俺たちをフォローしてくれた警察のお偉いさんいたよな」

明るいグレーのスーツを着た相内が、天井を見上げながら記憶をたどる。

高級そうなシルバーの時計が腕組をした拍子にあらわになる。

かばんも有名なブランド物なので、高価なものに関心があるようだ。

「ああ、あの人か。六年前は公安部長をしていて、アメリカで出張で来ていた時たまたまあの事件があったから、日本で辺に騒ぎ立て

られないように手配してくれてたな」

相内の振りに、警察事情にも詳しい検事の梨本が答える。

日本人学生によるアメリカの殺人事件とくれば、マスコミが黙っていそうにないものだが、当時の公安部長のおかげで新聞の三面記事で済んだと言う。

内心佐藤は、それで自分も知らなかったのかと合点がいった。

「あの時はそれで助かったけど、今回はお前が頼りだよ。涉。これ以上被害が広まる前になんとかしてくれ」

斉藤は被害者側に成り得る立場からなのか、悲痛な面持ちで言う。高木もそれに対して力強くうなずいた。

「ああ、わかってる。なんとしてでも必ず犯人を捕まえるよ。……多分、次に話を聞くことがあったら所轄に呼ぶかもしれないけれど、協力してほしい。あと、外出は最低限に控えたほうがいいと思う」「そうだな。不必要に外出して、怪しまれたらまったもんじゃない。できる限り家にいとくか」

相内は苦笑して手帳を取り出す。

スケジュールを確認して家に居られる時間を確かめている。

高木が「見せてくれないか」と言うのと、快く渡した。日付欄を見れば、次の大きな仕事まで空いているようだ。

一方よれよれのダークスーツを着た梨本が、間延びした声を出す。

「あー、そういえば俺一週間くらいずっと事務所に詰めてるわ。これって外出になるのか？」

「おいおい、仕事忙しいのもわかるけどたまには帰ろうぜ。そんなんだから、顔に張りが無いんだよ」

「まじか」

齊藤の指摘に、梨本は無精ひげに手のひらを滑らしながら案外真面目に驚く。

相内がそれに合わせて「その無頓着さは昔から変わらないよな」と笑った。

内容さえ問わなければ、仲間達が雑談するその光景は六年前の大学生生活を思い出させる。

在りし日の記憶に思いをはせているのか、目を細める高木を、隣で佐藤がちりと見た。

彼が一体どんな感情を抱いているのかはわからないが、楽しいものではないことは確信できた。

二日目、IX

「なるほどなあ。ついにあのひよろつとした刑事はんにもお前の死神具合が乗り移った感じやな」

「おめーにだけは言われたくねえよ」

雪乃が死んだ後で捜査の様子を伺いに署内へ来たジェイムズが、椅子に座ったまま魂が抜けたように呆けていた高木を忘れなかったのは必然と言えるかもしれない。

それほど彼女の死は彼に衝撃を与えていた。

その話を聞いたコナンは、夜平次に電話をしていた。

今回の事件について意見を聞くためだ。

そして事件の概要を聞いた平次は、今の台詞を半ば呆れた風に言ったのである。

「まあ、冗談は置いておくとして。六年前にゼミ生が教授を殺してそのまま自分も自殺、そして今また元ゼミ生が二人殺されたつちゅうわけか。当時で全てが終わった事件と、今更繋がりがあのような事件が起こる理由がわからんな」

自室で回転式の椅子に座っている平次はぐるりと回った。

考え事をしている時に椅子に座ると、自然にやってしまいうらしい。

一方東京のコナンは飲み会で帰ってこない小五郎の部屋で、自分の小さな敷布団の上に胡坐をかきながら頷く。

「ああ。六年前の事件でまだ犯人がわかってないなら、その犯人が今回にも関わってるかもしれないとか色々考えられるけど、そういうことでも無え。六年前は六年前でちゃんと終わってるんだ」

「かと言って、全く今回と関係ないとは思えんしな。昔も今も殺害

方法は銃による頭への発砲なんやし。あと、気になることと言えばその桐生雪乃っちゅう人の自殺への経緯やな」

「そうだな」

なぜ、あのタイミングで死んだのか。

なぜ、わざわざ警察署で死んだのか。

仲間に疑いがかかる前に自白して死ぬのなら、もっと早い段階でも良かったはずだ。

更に自供を躊躇うくらい自分優先の考えを持つ人物であれば、死ぬことすらしないはず。

後悔して自殺してしまうくらい責任感の強い人間が、なぜあの展開で死んだのだろうか。

自白の内容と行動の内容自体は矛盾が無い。

だが、そこに至るまでの流れに疑問が残るのだ。

「弱い自分でごめんね、か。普通に考えるなら、教授の脅しに面と向かって拒否することができず最終的には殺人という最悪の方法を取ったことを」弱い自分”やと言ったんやと思うけど……」

「ああ、なんかそこも引かかるよな」

二人ともはつきりとした理由は無かったが、彼女の死に間際の台詞には気になった。

いわゆる探偵の勘、というやつか。

だが推理には優先順位というものがある。

平次がため息を一つついて話題を変えた。

「この際、あやふやなことは後回しにしておいたほうがええかもな。次は状況証拠で考えてみよ」

「だとしても、二人の死亡推定時刻に容疑者全員アリバイ無いんだ

よな。被害者とのトラブルも無いそうだし、銃の扱いもアメリカで全員経験あるだろうし」

「その辺はきつと犯人も計算してるやろな。偶然四人もの人間にアリバイが無いなんて考えにくい」

「そのとおりだ。犯人は緻密な計画を練って殺人を行っている」

最初の須地が殺された事件で、今日の夕方から事情聴取を受けに行った時、千葉からさりげなく聞き出した捜査状況からコナンは判断する。

「絶対ばれないようにしているのは、三度目の殺人を計画してるからかもしれないぞ」

「それは俺も心配してる。捕まったらもう殺人は出来ないしな。明確な意思を持って殺害計画を立てているから、途中で捕まるわけには行かない。そういった犯人の意図を感じるぜ」

「計画的連続殺人か……かなり犯人は憎悪とか悪意とかがあるみたいやな」

「しかも、その殺人の意図が全くもって未だわからず。やっかいな事件だよ」

受話器に軽やかかる程度にコナンはうなる。

平次はそれに対して返事はせず黙った。

その代わり少しだけを間をおいて、こういった。

「そやけど、犯人の候補すら全く思いつかんわけやないやろ？」

今度はコナンが押し黙る。
かまわず平次は続ける。

「俺がお前から聞いた話で考える限り、犯人としての条件をほぼ満たしているやつが一人おるで。証拠は無い。やけど、そいつが犯人やとしたら全てに合点がいく」

アリバイが無くて、

須地と香川を殺害する動機があつて、

更にまた殺害を起こす理由を持っていて、

拳銃を扱い慣れていて、

六年前と同じく頭に発砲するほど雪乃に対して何らかの強い感情がある人物。

そんな人物が、一人だけ思いつく。

「高木刑事なら、できるやんな」

平次は躊躇うことなくその名を告げた。

全ての感情を置いて合理的に考えるなら、彼が最も犯人として適している。

最悪の事実を突きつけられたコナンはしかし、反論することは無く苦々しく頷くだけだった。

「……わかってるさ。彼が容疑者四人よりもっと犯人に近いことくらい」

「そやから俺に言っただけで欲しかったんやろ。自分だけでは認めたくなかったから」

「だらうな。悪い」

最も言いにくいことを、コナンのためにすっぱり切ってくれた平次に詫びる。

コナンだってわかっていただけたのだ。

人格的に殺しなんてするはずないと思っていても、高木が一番犯人としての条件を満たしていることくらい。

「高木刑事が犯人なら、二人を殺し更なる殺人を計画している理由も思いつく。

桐生雪乃を殺人へと走らせた元凶、もとい教授からの脅しを被害者が知っていてそのままにしていたことに対する恨み。彼女の自殺と同じように頭に撃って殺すことでその無念を晴らすつもりでいる。刑事だから、警戒されずに被害者に近づくことだって出来る」

ここまで綺麗に理由がつけられるのが空しい。

なぜ彼にはアリバイが無かったんだろう。

そうすら思えてくる。

「自分で言うといてあれやけど、あくまで高木刑事は殺害動機の想像が出来る人物やというだけや。それで他の容疑者四人の疑いが薄まるわけやないで。目的はわからんけど、その四人にもアリバイは無いんやから」

「ああ。わかってる」

確かに、高木であっても今更事件を起こした理由は明確に出来ない。

雪乃と同じである。

行動と原因に矛盾は無いが、タイミングに問題がある。

「俺から言えるのはそれくらいやな。次の殺しがりひんことを祈りつつ、起こったとしてもあの刑事にはアリバイがあることを望むしかないな」

「俺も祈ってるよ。次の殺害に関してはもう警察を信じるだけだぞな」

今回はあまり事件に関わっていないため、そこまで事件に深入りできないことをコナンは悔やんだ。

この子供のなりでは、捜査をする上でデメリットがメリットを上回ってしまう。

側にある子供用の掛け布団を視界に収めると、玄関から酔っ払った小五郎の声がした。

これ以上電話はしにくいので、平次に告げる。

「おっちゃんが帰ってきたし切るよ。今日はほんとにありがとな」
「ええてええて。知り合いが犯人かもしれないから、俺やつてお前に電話するやろっしお互い様や。――歯あ食いしばってがんばり」
「おう」

だが、コナンたちの願いは無慈悲にもかなえられなかった。

次の日の朝。

梨本和文が玄関先で頭から血を流して死んでいるのが、隣人によって発見された。

三日目、I

梨本の死因もやはり銃殺だった。

マンシヨンの自分の玄関を開けると、ドアの内側に仕掛けてあった糸が引つ張られ、玄関の片隅の壁際にセッティングされた銃が発砲するようになっていたという。

夜遅くに帰宅した梨本はドアを開け、閉めた瞬間そのトリックが発動し銃殺されのである。

ドアを閉めたままでも血は隙間から外に流れ出て、朝隣人がそれを発見して殺人が発覚した。

この仕掛けは、梨本が事務所に詰めたままで帰宅していない一週間の内にされたとみて間違いない。

また容疑者の斉藤、西野、相内のアリバイは無かった。そして高木にも。

彼にも一週間自由に動ける時間がありすぎた。

最初の殺人から三日間で三人もの人間が殺されている。

ついに高木を除いた容疑者三名を、昼のうちに捜査本部のある米花署に事情聴取で呼び出すことが決まった。

証拠もアリバイも動機も無い三名を呼び出すのには、警察も躊躇いがあつたようだがこれだけの人数が殺されては仕方ない。

事情聴取が決定した日の朝。

佐藤は再び杯戸中央病院に来ていた。

捜査よりも私用の割合が高いということは彼女自身自覚していたが。

しかしそれでも彼に聴きたいことがあつた。

高木と親しい仲である西野誠司に、だ。

昨日と同じく、院内の庭でベンチに座った西野に佐藤は自販機で買ったコーヒーを手渡した。

「連日押しかけてごめんなさいね」

「まあ、いいですよ。昼は事情聴取で結局一日潰れてしまっんで」

さすがの彼も苦笑する。

あまりいい気分はしないのは当然だろう。

「ええと、佐藤刑事でしたっけ。座らないんですか」

「遠慮しておくわ。立ってたほうが落ち着くんです」

「へー、仕事柄ってやつですか」

「そうかもしれないですね」

「刑事も大変っすね。——で、聞きたいことってなんですか？」

昨日聞いた彼のケータイ番号にかけた彼女は「聞きたいことがあるから、午前中に行ってもいいか」と言っていた。

午後からの事情聴取とは別に、彼女自身が聞きたかったこと。それは。

「桐生雪乃さんのことについてなんですけど」

一瞬彼の目の動きが止まる。

「涉さんから聞いたんですね」

「ええ、昨日貴方と別れてから。高木君から聞きました。自分の口で伝えたいから、桐生雪乃さんのことについては何も言わないでくれと、高木君から頼まれたそうですね」

昨日六年前の事件について語った彼は、申し訳無さそうにそう言

っていた。

そんな高木が今回の容疑者の中で唯一心を少しでも見せていると思われる西野は、缶コーヒートのプルタブを開けて飲もうとしたが、途中で止めて佐藤を見上げる。

「じゃあ、なんで雪乃さんのことを俺に聞くんです？ 涉さんに直接聞いたんじゃないですか？」

「六年前の事件のことは聞きました。高木君と想いを寄せ合っていた雪乃さんが教授を殺して自分も死んだということは。でも、それだけです。雪乃さんがどういった人だったのかは聞けませんでした」

彼女のことを話すにはあまりにも勇気が要りすぎた。

佐藤も高木も。

「それに、彼女に強い思い入れがある高木君より、客観的に見れそうな貴方に聞いたほうが真実に近いと思ったので」
「なるほど」

感情を省いた真実を知りたい。

これも事実ではある。

「だから教えてくれませんか？ 桐生雪乃さんがどんな人だったのか」

西野は少しうつむく。

そして再び見上げると、まじめな顔つきでこう言った。

「それは、警察からの指示ですか？ 貴女の意味ですか？」
「え」

虚を突かれたように、佐藤ははっとした。

「雪乃さんのことを調べるように、貴女が命令されたのかつてことです」

この問いに彼女は意図を測りかねて迷う。

これはれっきとした捜査だ。

プライベートで来たわけではない。

だが。

「私の意志で、来ました。貴方への質問は捜査の一つになりますが、私がこの事件の解決に必要なと思ったから来たんです。上からの指示ではありません」

ここは公務員独特のあやふやな答え方をすべきではないと直感的に彼女は思った。

なので正直に答える。

その答えに満足したのか、彼はふっと笑った。

「わかりました。……なんか、あの涉さんが貴女を選らんだわけがわかったような気がしますよ」

そこでやっと西野はコーヒーをぐいと喉に流し込んだ。

今ので半分くらいは飲んだのではないだろうか。

一方佐藤は自分と高木の関係を知っていたのか、という言葉をこちらにも飲み込んだ。

つとめてプライベートなことには関わらないよう、心に留める。

「雪乃さんがどんな人だったか、ですよ。六年前のことだけど、未だにはつきり思い出せる辺り、彼女がどれだけ魅力的だったかが

身にします」

そんな彼女の心には気付いていないのか、西野は桐生雪乃について話し始めた。

懐かしそうに、だが悲しげに。

三日目、II

「雪乃さんは綺麗な人でした。あ、外見だけで言うのなら、貴女のほうが断然綺麗ですよ？ でも……なんていうのかな、雰囲気綺麗だった」

ベンチに座り、半分だけ中身が残る缶を、両手でいじりながら西野は言う。

「性格は至って真面目。几帳面。そして責任感は一倍感。だから、却って涉さんと気が合っただと思います。ほら、あの人も真面目で正義感強いけど、結構ずぼらなところあるじゃないですか」

冗談めかして同意を求めると、佐藤は苦笑した。

確かに、高木には愛嬌程度に少し抜けてるところがある。

几帳面でしっかり者の雪乃とは、互いを補うような関係になれたのだろうと察した。

「俺も彼女には随分レポートとかを手伝ってもらいました。ほんとにね、良い人だった。俺はあの二人がいつか幸せになれば良いと思ってた」

思っていた、という過去形に、自分が発した言葉ながら彼はため息をつく。

彼にとっては憧れのカップルだったのだ。

高木とは違う意味で、六年前の事件では心に傷を負ったに違いない。

「ああ、だからといって貴女と涉さんが付き合うことがどうかそ

ういうわけでは勿論無いっすよ」

「ええ、わかってます」

「まあ、その、あれです。俺自身信じられなかったんです。そんな良い人が教授を殺したことが」

この人自身も良い人なんだろうと佐藤は内心感じる。
自分にまで気遣いを見せるくらいなのだから。

「でも、そんな反面思いつめたらぬかるみにはまりそうな性格だということも知ってたから、声を大にして彼女が殺人をするなんてありえないとは言えなかった」

真面目で責任感が強いからこそ、追い詰められた彼女が何をしてくすかはわからない。

そういうことを彼は言いたいらしい。

「涉さんも、彼女が殺人を犯したことに否定するような発言はしなかったと思います。脅迫の事実を知っていた者に対して、非難もしなかった。ただ事件の後暫くずっと、魂が抜けたみたいに空を見上げてました。彼女が自殺したとき、すごく晴れていたんですよ。だから快晴の日は特に呆然とした感じで見てた気がします」

「……やっぱり、雪乃さんが人を殺したことがショックだったせいかしら」

「いや、ちょっと違うと俺は思っんです」

少し言葉を濁す感じで彼はうつむく。

「どういうことですか？」

「あくまでこれは、俺の勘です。本人から聞いたわけでもない。…でも、空をずっと見上げてる涉さんを見て何となく感じたんで

す」

何の感情も映し出さないまま。

空の青色だけをその目に焼き付けるかのように。

「あの人は、雪乃さんが人を殺したことにショックを受けたんじゃない。拳銃を発砲して自殺したことがショックだったんじゃないかって」

丁寧にお礼を言っただけで西野と別れた佐藤は、駐車場に止めた車の中でエンジンをつけずに、どこを見るでもなくぼんやりとしていた。彼が最後に言った、あの台詞が頭から離れないのだ。

以前、自分が昔の思い人を殺した犯人に対して発砲しようとしたときがあった。

あの時高木が追いかけてきて、体を張ってそれを食い止めた。そして「人は思い出の中でしか生きることが出来ない」と言っただけで諭した。

彼女は、思う。

と
彼はあの時、自分ではなく桐生雪乃を止めたかったのではないか、

三日目、IIII

白鳥は高木から渡された捜査資料を手にしたまま固まってしまった。

朝早くから捜査本部で、今朝殺された梨本和文の行動を洗っていた彼のもとに、高木がやってきたのはつい先ほど。

いつもの捜査と変わらない態度で、数枚の紙切れを渡したのだ。

「今回の事件と関わりが深いと思われる過去の事件の詳細です」と言つて。

驚きつつも顔色を変えことなくそれを受け取ったのだが、その内容は何の気構えも無しに読むには重すぎた。

文章をたどればたどるほど六年前の悲劇に戸惑う。

紙を持ったまま思わず手が止まってしまったが、次にゆっくりと机の上に置いてパイプ椅子の背もたれに体を任せた。

深く深く、ため息をつく。

「なるほど、目暮警部が慎重過ぎるわけがわかったよ」

——まあ、私にも色々考えるところはあるんだよ

昨日上司に言われた言葉を思い出す。

その上司は今更に上の人間に呼ばれて警視庁に戻っている。

白鳥は右手を額に当て、目の前の事実を整理しようとした。

どんな状況でも冷静に対処しようとする姿勢はさすがキャリアといったところか。

対する、高木は申し訳なさそうに「すみません」と言つ。

「警部が知っているということは、上の人間も把握しているという

ことかな」

「はい。それでいて白鳥さんに今伝えたのは、現場に一番近い上司として知らせておくべきだと思ったからです」

その判断は賢いが、不意打ち過ぎる報告である。

不謹慎な例えながら、ドッキリに近い驚きだった。

「和文も殺されましたし、上層部だけで押さえて置くのはもう無理だと思います。多分、今日の昼にでも上から六年前のことが捜査員全員に知らされるでしょう」

それは白鳥も仕方ないと思う。

最初の事件が起こってからに比べると、今の状況はかなり深刻になっている。

高木には可哀想だが、過去の事件を知らない限り捜査に支障が出る可能性は十分あった。

「君はそれで大丈夫なのかい」

珍しく案じる先輩刑事に驚いたのか、高木は少しだけ目を丸くする。

そしていつものような困った顔で苦笑した。

「昨日佐藤さんに話した時点でもう割り切っていますよ」

その言葉に、白鳥は真っ先に思ったことを口にした。

「佐藤さんにも話したのか」

まだ完全には納得していないが、彼女が目の前に男に惚れこんで

いる事は一応事実だ。

そしてこの男も同じくらい大事に思っていることも。

白鳥の問いに彼は頷いた。

「はい。昨日容疑者の事情聴取をしている合間に話してあります」
「そうか」

一体その時二人は何を思っただろうか。
彼には想像しにくかった。

座ったまま見上げるが、直立不動の高木の表情からはその時の状況をうかがい知る事が出来ない。

少なくとも彼女が心を痛めるような状況ではなかったことを心の底から願った。

同時に恋敵ではあるが、目の前の男が追い詰められる展開も望みたくなかった。

もう一度、今度は軽く息を吐いて、白鳥は背筋を真っ直ぐに戻して資料をとんとんと手でまとめる。

「……では、この資料は昼からの事情聴取でも使わせてもらおうよ」

クリップではさもうとするが、思いついたようにはたと手を止めた。

「そういえば、今日佐藤さんは現場検証に行くと言っていたけど、どの事件の現場だったか知ってるかい」

一時間ほど前に彼女から報告をもらったが、すっかり三つの殺害現場のうちどれだったかを聞くのを忘れていた。
彼なら知っているだろうと思いついてみる。

しかし、意外な答えが返ってきた。

「いいえ、昨日の聴取の後別れてからは話していないので。あの後は確か千葉と一緒に被害者宅へ行ったらいいんで、千葉に聞いたほうがいいかもしれません」

この返事に、昨日の夜何気なく佐藤に高木の動向を聞いたときに「そういえばさっきから見てないわね」と返されたことを思い出した。

プライベートを抜きにしても彼らは息の合った仕事をしてきた。

どこか、違和感を覚える。

だからこそ、彼の返事に白鳥は思わず言及する。

「一度も話していないのか」

高木も、同じく意外そうな顔をした。

そんなに不思議なことなんだろうかと、心底不審がる様子で。

「ええ、行動が別々でしたし。佐藤さんは外回りで僕は警視庁で六年前の事件の捜査資料をアメリカから取り寄せられないかと交渉していました。あの、何か問題でも」

おずおずと問う彼に白鳥は「いや、いいよ」と手で制した。

「ちなみに、六年前の資料は手に入りそうなのかい」

「何とか。色々手続きが要るようで、上の人に頼み込みました。早かったらそろそろ届く頃じゃないかと」

「わかった。午前中に届くようならそれを確認してから君は一度仮眠に入ったら良い。報告からして、君寝てないだろう」

目暮を席をはずしている今、上司の代役として捜査員のスケジュールを整理していく。

白鳥の淡々としつつも気遣いのある指示に、高木は頷いてから頭を下げる。

「わかりました、ありがとうございます」

そうして来た道を戻っていった。

白鳥はその後姿を眺めつつ、もう一度手の中にある資料に視線を落とす。

やはりどこか、納得いかない。

高木と佐藤の行動に、だ。

彼は心の中で首をかしげる。

あの二人が行動を全然把握し合っていないことが意外だった。

自分は思ってた以上に高木と佐藤の関係を理想的なものに考えていたのだろうか。

いや、そんなことは無いと思いたい。

ならば、なぜ、二人は。

昨日彼らは六年前の事件について話したという。

その時に、何かがあったというのか。

「……参ったね」

どうも、この状況に快く思わない自分は、存外二人の行く末を案じているようだ。

その時点で既に自分が「恋敵」ではない立場であることに、白鳥は人知れず苦笑した。

三日目、I V

「はい、これでいいかしら？」

「うん、ありがとうジョディ先生。ジェームズさんにもありがとうって言っておいて」

「ええ」

昼過ぎに病室にやってきたコナンは、ジョディからある資料をもらいお礼を言う。

ジェームズに、六年前の大学教授銃殺事件の捜査資料の一部を見せてもらえるよう昨日の内に頼んでおいたのだ。

資料全ては流石に無理なので、知りたい部分だけを伝えて。

頼まれた彼は知りたい内容を聞いて少し意外そうな顔をしたが、「事件の解決の糸口になるなら」と快く引き受けてくれた。

しかし今日は他の用事で病院にはいないため、ジョディがその資料の手渡しをすることになった。

資料を手にしたコナンは、早速椅子に座って紙をめくる。

穴が空くほど、というのにふさわしいくらい凝視するその様子に、ジョディが言う。

「私は今回や六年前のことはよく知らないんだけど……、六年前の事件で容疑者が事情聴取を受けた順番や現場の見取り図が、今回の役に立つの？」

彼女は昨日聞いたジェームズと同じ反応を見せる。

資料から目を離さず、コナンは肯定した。

「うん。僕が疑問に思っているのは、六年前なぜ桐生雪乃さんがあのタイミングで死んだのか。そしてなぜ今になってまた連続殺人事

件が起こったのかつてことなんだ。この資料は、その手がかりになるかもしれない」

「そう」

一応頷きはしたが、そう教えられても、ジョディには皆目検討もつかない。

まあこのクールキッドは自分達とはかけ離れた推理力を持っているし、信頼もしているので、あまり深く考えないことにする。

資料はこの場で見せるだけなので、彼女は「少し外に行ってるから、終わったら呼んで頂戴」と言って部屋から出て行った。

一人になった病室で、コナンは事情聴取の順番をじつと見つめる。容疑者の名前や人物像は、朝のうちに須地が殺された件に関する証言で警視庁に言ったときに、上手く千葉から聞き出していた。

そして、その人物達の名が載る六年前の資料。

雪乃が自殺した日に行われた事情聴取の一番目のグループが、須地・斉藤・そして当の雪乃だ。

二番目のグループが西野、その他ゼミ生二名。三番目が相内・梨本・その他ゼミ生一名。

最後に、唯一アリバイが立証された高木。

これは厳密に言えば呼ばれた順番だ。

二番目、三番目が聴取を受けている間に高木が呼ばれていたから、雪乃が自殺するとき西野や梨本、相内もその場にいた。

一方一番目のグループだった雪乃は、一旦聴取が終わり寮に戻った後再び警察署へ行ったことになる。

事情聴取では何も言わなかった彼女が、寮に戻った後急に自白しようとしたその経緯に疑問が残っていた。

寮に戻るまで、戻った後、彼女に何かがあったのだ。

そのきっかけは彼女自身によるものなのか、はたまた他の原因が

あつたのか。

だからこそ、彼女が死んだ日の容疑者全員の行動がカギになるとコナンは考えていた。

次に、ゼミが合宿をした宿泊所の見取り図が載っているページをめくる。

宿泊所はコの字型に建てられており、向かい合って男女のゼミ生で泊まっていた様だ。

堂々と外に出るなら男女互いの部屋からその姿が見れるに違いがないが、こっそりと周りの草木に隠れこんでなら、見つけにくい。

そういう場所だった。

なので、六年前の事件では雪乃は目撃される可能性の高い館内ではなく、一旦外に出て庭をつき切って、教授のいる部屋へ忍び込んだのではないかと思われていた。

そこでコナンはたと気付いた。

高木には当時アリバイがあった。その宿泊所から夜にコンビニに行っていたという、絶対的なアリバイが。

なのに、その彼のアリバイが判明し確認のために呼ばれたのは、事件発生から数日後の雪乃が自殺した日だ。

——なんで高木刑事はすぐに自分のアリバイを言わなかったんだ

コナンの頭の中に新たな疑問が生まれる。

この流れなら、恐らく警察が調べてやっとアリバイがわかったのだろう。

高木自らが証言したのなら、事件発生のその日にでも彼は容疑者から外れたはずだ。

小さな名探偵は息を吐き、動悸が高くなった心を落ち着かせる。

そして今得た知識や、昨日服部と話し合っていたときに浮かんだことを頭の中に並べてみた。

「弱い私でごめんね」という雪乃の最期の言葉。

唯一アリバイがあつたのに、それを言わなかった高木。事情聴取に呼ばれた順番。見取り図。

今回殺された須地・香川・梨本。

容疑のかかっている西野・斉藤・相内・高木。

異常な早さで進む連続殺人。

本気で頭を回転させて、あらゆる手段を想像する。

無数の石ころの中から磁石を見つけ出し、さらにその中からぴたりと合わさる陽極と陰極を探すような。

どこかにあるはずだ。

この世に陽極だけしかないなんてことはありえない。

表があれば裏がある。

疑問があれば真実がある。

どこだ、どこにそれがある。

コナンは目まぐるしく推測と事実を組みあわせていく。

すると、陽極と陰極のペアを一つだけ思いついた。

嫌な汗が、背筋に流れる。

証拠は無い。

ただの想像だ。

しかしこの方法なら、桐生雪乃はあのタイミングで自殺するだろうし、今回また殺人が起こった理由も推測できた。

——まさか、もしかしたら、高木刑事も桐生雪乃さんも……

何ともいえぬ切なさ、やるせなさをコナンは覚えた。

この推理が正しいとすれば、本当の犯人は一体誰だったのだろうか？

三日目、V

思ったよりも早く、六年前の捜査資料が警視庁に送られてきた。当時この事件に関わった日本警察の上層部人間の力によるものだ。とはいえ、機密事項なので、初回の資料は向こうのマスコミなら知っていそうな上辺の情報がほとんどである。

捜査本部の上を通じて、高木の元にそれは降りてきた。

捜査員が大勢居る本部を避け、彼は側にある自販機コーナーで資料を持ったままベンチに座る。

すぐには資料を目を通さなかった。

英字の表紙をじっと見下ろしたまま。

表紙を翻訳すれば「大学教授殺人事件」といったところか。

被害者は銃殺、加害者も自殺し書類送検止まりで事件は終わっていた。

大体の流れはそういうことだと彼も当然知っている。

ただ、当時とは違い、今の高木は刑事だ。

この中に書かれている専門用語もわかるし、六年前のアメリカの刑事達がどのような捜査を行っていたのかも予想がつく。

だからこそ、この捜査資料を見るには葛藤があった。

目には見えぬ、とてつもなく大きな壁を乗り越えない限り、資料を見ても恐らく意味は無いだろう。

自販機の静かな電子音だけが響くコーナーで、彼は表紙の文字をさらりと撫でた。

一瞬、佐藤の姿が脳裏に浮かぶ。

なぜそこで雪乃ではなく彼女を思い出したのかは高木にもわからなかった。

しかし次に彼は自然と一ページ目をめくっていた。

その紙切れ一枚が、重石のように肩に負担をかけそうだった。

「コナン君は帰ったのかね」

「ええ、本当についさきほど」

小さな名探偵がいなくなった病室で、ジョディが貸した捜査資料を再びファイルの中に収めていると、上司が戻ってきた。ジェームズはその紙をちらりと見て問う。

「その資料は彼の推理に役立ったのかい？」

妙齢の金髪美人は美しい眉を少しだけひそめる。

「多分。これで全てがわかったよ、と言ってたし……でも」
「But？」

語尾を濁す娘同然のような部下に、彼はつい母国語が出た。ジョディは少し考える素振りを見せて答える。

「なにか、とても苦しそうだっただわ」

その返事に、今度はジェイムズが顔を若干しかめた。
彼女が驚く。

「思い当たる節があるんですか」

重々しく彼は頷いた。

そのまま彼女の前を通り過ぎ、病室の窓際で立ち止まる。
年の割りに、良すぎるほど背筋がまっすぐと線を引いている。
床と垂直の立ち姿で、彼は晴れた空を見上げる。

そういえば、三日程前から晴天が続いていたなとジョディは思った。

「思い当たる、というより思うところがある」

逆行でジェイムズの表情は見えにくい。

「実は、あの事件には一つだけ謎が残っていてね」

謎、という言葉に彼女は声にせずともつい口を開けた。

「その謎が、あの事件を更に現実と……幻と言すべきかね、その二つを混ぜ合わせてしまった」

じつと耳を傾けるジョディに、彼は振り向いて言った。

「私のような古い人間がこういうのも問題かもしれないが、あの事件は我々には解明できない、不思議な何かが影響していたと思うんだよ」

長年FBIの捜査官を務める上司から思いもかけぬ意見を聞いて、
ついにジョディが問うた。

「一体その謎とは何だったのですか」

巨大な犯罪組織を追い続けるこの彼が、解明できないと言い切っ
てしまう謎が存在するのだろうか。

若いジョディには想像しにくかった。

再びジェームズが窓のほうを向き、暫く黙る。

だが、意を決してかのようにカーテンを閉めた。

「六年前、ミズ・ユキノが自らの頭を撃った弾丸は……まだ見つか
っていないんだよ」

それは、トリックでもなんでもなく。

この世から雪乃と共に消えてしまったような気が、ジェームズに
はしていた。

一方のジョディはその謎が意味するところが皆目見当がつかない。

「あのクールガイが言うのだから、また別の事実があるのだろう。
しかし、その事実だけでこの事件は語りきれないと私は思う」

現実的な事実と非現実的な事実が合わさった、死。

一種の幻想にも似た、このベテラン捜査官の意見は、実は最も真
実に近かったことに後々判明することになる。

三日目、V I

病院内の駐車場に停めた赤いアンフィニの運転席で、未だ佐藤は動き出せずにいた。

六年前の事実。推測。感情。東都タワーの爆破未遂事件で、彼が自分を止めたその真意。

昨日高木から聞いた話と今日西野から聞いた話を合わせて、堰を切ったように頭の中に様々な情報が渦巻き、エンジンをつける気になれない。

なぜか、考えたくない。

過去を、今を、全てを。

ハンドルに額を当て、じっと目を瞑る。

頭のどこかが麻痺してしまったかのようなのだ。

痺れにも似た痛みが脳内を巡っている感覚を覚えた。

昔殉職した父や松田のことを思い出す時とは、また違う辛さがあった。

一体何なのだ、この感情は。

佐藤は戸惑い、ハンドルに乗せた手をぐつと握る。

それでも、昼になれば容疑者三人が事情聴取を受ける。

自分ひとりで勝手に動き回るのはこれくらいにしておかないと、後でまずいことになる。

早く捜査を再開せねばと重い体を起こすと、ウィンドからこんこんと軽い音がした。

右を振り向くが、誰もいない。

今までの経験上、まさかとは思いつつ、そこで視線を下に降ろしてみた。

そのまさかは当たっていた。

小さな名探偵が、車の中の自分に向かってどこか子供っぽくないような笑顔で手を振っているのだ。

驚いたが、すぐにドアを開ける。

「こんにちは、佐藤刑事」

「どうしたの Conan 君、こんなところで」

運転席に座ったままの状態、足ごと外に向けて Conan と対面する。

Conan は彼女を見上げてにっこり笑う。

「僕の知り合いの人が入院しているからお見舞いに来てたんだ。それでたまたま佐藤刑事の車を見つけたから」

本当はジョディから捜査資料を見せてもらった帰りであるが。

しかし Conan はその途中の駐車場で見知った車を見つけた。

彼女とも話をする必要があったので、発車しそうな車に慌てて駆け寄ったのだ。

「佐藤刑事はもしかして、あの連続殺人の捜査？」

「ええ。そういえば Conan 君も一回目の事件の目撃者だったわね」

この複雑な事件をどこまでなら話してもいいのか、佐藤は一瞬戸惑うが表には出さないよう努める。

小さな名探偵は確実に「名探偵」だが、それでもこの事件は話してもいいことと悪いところがある。

そんな彼女の迷いを察したように、Conan が”先制”をしかける。

「ねえ、佐藤刑事は六年前の事件のこと知ってる？」

その言葉に今度こそ彼女は小さく口を開けずにはいらなかった。警察の上層部や高木本人から聞いた自分、そして容疑者達しか知

らない過去のはずだからだ。

声を出さなかっただけでも立派だ。
必死に冷静さを取り戻そうとする。

「どうしてコナン君がそんなこと聞くのかしら」

ゆっくりと質問をすることによって、自分自身も落ち着かせる。

コナンは、それでも追従を緩めない。

「僕のお父さんとお母さんは外国にいるんだ。それで、お父さんに今回のことを電話したら心当たりがあるって言って調べてくれたんだ。ごめんね、勝手に調べちゃって」

前もって用意しておいた理由を、さも真実のように述べる。

そして次に、思わず身構えている佐藤に対して、笑顔を消し真面目な顔つきで問うた。

「その様子だと、桐生雪乃さんのことはもう知っているんだね」

暫くの無言。

互いに目の中を覗き込むような視線を交わす。
だが、その探りあいには耐え切れなかったのは、

「ええ、知っているわ。それで、コナン君は何が言いたいのかしら」

ため息をついて佐藤は苦笑する。

この少年に白を切るのは、恐らく事件解決のためには不利益なことだと改めて思う。

壁を取り払ってくれた彼女に、コナンは真相への扉を叩く。

「今回の事件も、六年前の事件も、本当の真実からは遠く離れたままだよ」

佐藤は怪訝な顔をする。

「今回はともかく、六年前も？」

なぜか、心が揺れる。

「うん。でも、離れたままなのは犯人だけのせいじゃないと思う」

そこで突然、佐藤の中で先ほどの痺れのような痛みが更に度を増した。

開けてはいけない。

開けてはいけない。

知らないはずなのに、本当の真実というものに拒絶のサイレンが鳴る。

「あの高木刑事がずっと静かなことも引つかかるしね」

そつだ、あんなに優しい彼なら友人が殺された時点でもっと動くはずだ。

犯人が同じく友人の一人だったとしても。

犯罪に手を染めた人間に、馴れ合いの感情を持つような男ではない。

彼は優しい優しい「刑事」なのだから。

「佐藤刑事も、ここで見る限りいつもと感じが違うよ。自分のお父さんを殺した犯人のときでさえ躊躇い無く真実を見つけたのに、今の佐藤刑事は全てに迷ってるんじゃないかな」

心臓をわしづかみにされたような揺さぶり。

佐藤本人が気付きたくなかったことにさえ、コナンは土足で入り込んだ。

コナン自身の目にも、非常に苦渋の色が混じっていたが。

彼女は狼狽しながらも、今までの自分と高木の二人の行動を思い返す。

事件が起こり、容疑者達への面会を行った二人。

六年前のことについて話し合う二人。

そこでお互いの絆にひびが入るはずも無かった二人。

お互い全てを話し、もう何も自分達を妨げるものは無いと思っていた二人。

その夜、別々の捜査で分かれた二人。

……それからずっと、会話を交わしていない二人。

いつの間にか俯いていた佐藤は、はっとして顔を上げた。

違う、いつもと同じように自分達はいつもと違う。

どこから自分達はすれ違ってしまったのか。

いや、お互いを見なくなってしまったのか。

記憶をたどり、ある一点にたどり着く。

西野の事情聴取を終え、三人の容疑者に会いに行くときの車中の会話だ。

あまりこちらが気にしすぎるのも却って悪いと思い、深く高木の心まで入り込まなかったあのときだ。

もしかしたらあの時、自分は現実を見たくなかったのではないだろうか。

高木のためと言いつつ、実は自分のためだったのではないだろうか。

彼を心の底から想っているからこそ、彼の深層までをのぞきたくなかった。

その奥底にあるのは、彼自身気付きたくない真実だったから。

そこまで考えて、佐藤の脳裏に先ほどまで運転席で一人考えていたことが再び呼び戻される。

彼が、本当に止めたかったもの。

それは一体なんだった？

「みんなそろそろ向かい合っべきだよ、真実に」

刑事達の、半ば怒声にも似た話がそこかしこで交わされる捜査本部の一番前で白鳥はうろたえた。

仮眠を取るついでに着替えを取りに戻ると行つて家に帰った高木から渡された、六年前の捜査資料。その一部をファイルから取り出そうとしていたが、それを思わず床に落とした。
今聞いた言葉を、信じたくなかったからだ。

「え、今何と？」

彼の戸惑いに、告げた目暮のほうがより一層眉間にしわを寄せる。そして、重々しく繰り返した。

つい今しがた、警視庁から上層部と話し合いに行っていた彼が戻ってきて白鳥に言った第一声は。

「高木を暫くの間内勤にしると上から指示が来た。……まあ、他の三人も聴取を受けさせる以上、同じくらいアリバイの無いあいつを自由に動かすわけにはいかんということだ」

そう。それは、警察が高木を外には出させたくないということだ。

つまりは、内勤とは名ばかりの容疑者扱いだった。

三日目、VII

着替えを取りに自宅へ戻っていた高木はソファの上で大きく息を吐いた。

体力よりも気疲れによる、眉間のしわ。

ほんの少しだけヤニで黄ばんだ天井を暫く眺めた後、足元のリビングテーブルに視線をおろす。

テーブルには小さな段ボール箱が開封された状態で置いてある。

目の前の箱を見つめて、高木は思う。

自分は一体何をすべきなのかと。

六年前「彼女」が教授を殺したと言って自身も自殺し、現在三人の人間が三日間で殺された。

めまぐるしく動く現実。

そして、それに引きずられるように、先ほど目暮警部から電話で告げられた「内勤」の命令。

これらの事実と箱が全てを証明しているのだ。
もう逃げることは出来ない。

須地が殺されたときから、自分はうすうすわかっていたのかもしれない。

こうなることが。

それでも今の今まで何も出来なかった。

それはきつと自分が弱かったから。

そう、六年前彼女が言った「弱い自分でごめんね」にも似た、弱さ。

だからこそやるべきことをやらなければ、きつと「彼女」は浮ばれない。

あの笑顔がふつと脳裏によぎる。

いつも自分や周りの人間に安心感と希望を持たせてくれた笑顔。そして次に思い出されたのは、そんな彼女が自殺した頭上で澄み渡っていた青空。

丁度、今のような晴天だった。

ベランダから見える空は、あの時の空とよく似ている。

青空すら、自分が逃げることを許さないようだ。

”私が人を好きになるのって相当なことなんですからね？”

昨日佐藤が言ってくれた言葉がリフレインされ、彼は拳を握り締めた。

目を閉じ、体を屈め祈るように額を両拳に当てる。

数分後、ゆつくりと顔を上げたときには手には汗が滲み出ていた。暑さとは違う意味合いのそれを少し眺めた後、彼はテーブルに右手を伸ばした。

箱から、ゆつくりと拳銃を取り出す。

ニューナンプM60。日本警察が採用している銃だ。

そんな銃を持つ自分が、真犯人である自覚が彼には十分あった。

三日目、VII

成り行きで佐藤はコナンを助手席に乗せて米花署へ向かう。
正午をとくに過ぎ、一時ごろになっっている。

しかし彼女は空腹を全く感じなかった。

というより、全神経が今回の事件に注がれているようだ。

少しでも触れれば感電しそうな、敏感で鋭い感情を抱きながら。

助手席のコナンは病院内のコンビニで買ったスポーツドリンクを
手に、手中の手帳を眺める。

先ほどジョディから見せてもらった捜査資料から簡潔にまとめあ
げたものだ。

実はコナンも佐藤も、車に乗ってからは事件のことについては一
切口にしていない。

コナンは、自分があれ以上何かを言うべきではないと思っていた。
彼女も高木も、実際の自分よりも一回りくらい大人なのだ。

少し背中を押すだけで十分だし、それ以上は相手を傷つけかねな
い。

どのような展開に転んだとしても、二人が望んだことならいいと
も思う。

その判断は一見冷たいようで、信頼があるからこそその考えである。

一方の佐藤は、「そろそろ真実に向かい合うべき」というコナンの
言葉に、冷や水を浴びせられたようなショックを受けていた。

いや、ショックと言うより衝撃というべきか。

黙って、今までの事件の経緯と六年前の事件を比較する。

コナンの言葉を聞いた後では、自分でも驚くほど視点が変わって
いる。

見る側にとっても痛みを伴う視点であったが。

車の運転に乱れが無かったのは流石だが、米花署へ向かう自分の車にさも当然のごとくコナンが乗りこんだことに言及しなかったあたり、今の彼女はその痛みに耐えるのに必死だったのだ。

「では、高木君を内勤扱いにしたうえで西野、斉藤、相内の容疑者三名を事情聴取することよろしいでしょうか」

「ああ、そうしてくれ」

冷静さを取り戻した白鳥が淡々とこれからの段取りを確認する。帰宅している高木本人には既に目暮が直々に電話で伝えてあるという。

もう彼は捜査本部には来られない。

警視庁で半ば軟禁状態になるのだ。

その事実对白鳥は、今回の事件の深刻さを思い知らされた。

驚かなかったといえようことになる。

しかし、今回の事件における目暮の慎重さや上からの指示が不気味なくらい早く来ることを考えると、納得させられた。

現職の本庁刑事に、容疑がかかっている。

これでいつもみたく「事件は会議室で」なんて悠長なことは言ってられないだろう。

こんなときばかり身内に敏感になってどうすると、上の管理職の面々を思い浮かべて白鳥は内心ため息をつく。

最悪な事態のときほど皮肉じみた冷静になれるのは、刑事という職業においては長点であろう。

重々しい雰囲気を纏ったままの目暮が、そんな白鳥に話しかけたのは、彼が十分にため息をついてからだった。

「白鳥君」

「はい」

「君が実践で最後に拳銃を発砲したのはいつだね」

思わぬ質問に、一瞬詰まる。
しかし、

「さあ……随分前だったはずですよ。多分所轄での研修時代に、威嚇で一発ガラスを撃った程度です。私は銃が嫌いなので」

苦手とは言わなかった。

嫌いだから苦手なのだ。

最初で最後の発砲。撃った後の手の震えは今でも容易に思い出せる。

だから、答えるなら「苦手」。

その意味に気付いているのか、目暮も肩を落として言う。

「だろうな。ワシはからつきしだ。むしろ上手なやつでも、苦手だと言う刑事は多い。怖いから撃っていた、と退職した上司から聞いたことがある」

白鳥は、そうですかと言うしかない。

怖いから撃つ。

その意味がわかるようではわからない。

一体このベテラン警部は何を言いたいのだろうか。

気の利いた返事は期待していなかったらしく、その警部は付け足す。

「怖いから撃つ、怖くないから撃つ。大抵二つに分かれるもんだが……それ以外の理由で発砲する場合、一体どんな心境なんだろうな」

それこそ、お天道様にしかわからないかもしれないが。

米花署の駐車場に赤いアンフィニをとめた佐藤はコナンとともに降車する。

降りた彼女の目には、強い意志が示されている。

戸惑いや悲しみ、怒りなどは全て車に置いてきたとでもいえそうなほど、すっきりとした顔つきだ。

そこでやっと、コナンがいるこの状況に気付いた。

「そういえばコナン君、私についてきてどうするの」

「せっかくだし、高木刑事にも会いたいな。いいでしょ？」

流石にコナンはまだ彼に内勤命令が出たことを知らない。

純粹に心配して、少し様子を見たかっただけである。

対する佐藤は、申し訳無さそうに、しゃがんでコナンと目線を合わせた。

マナーモードにしていた携帯に、白鳥からメールで高木の内勤のことが伝えられていた。

「悪いけど、高木君とは暫く——」

その時、米花署内から怒声が聞こえてきた。

息が止まるような剣幕だ。

「おいなにやってんだ」「どこいったんだ」、耳を済ませるとそんな言葉が行き来している。

慌てて佐藤とコナンはざわめく署内に入って、入り口付近から階段を駆け上がろうとする所轄の刑事に声をかける。

「どうしたの!？」

声をかけたのが本庁の佐藤だと知って、男は答えにくそうに、且ついらいらしながら言う。

「ついさっき米花市内連続殺人の容疑者三名が刑事と一緒にやってきたんです。パトカーを出て署内に入ろうとした瞬間、その後ろで違う車が一台止まって……」

佐藤をちらりと見て、言い放った。

「あの高木刑事が急に現れて、斉藤直の首根っこ掴んで上に行ったんですよ!!」

三日目、IX

佐藤とコナンは、他の刑事達に混じって高木が斉藤を連れて駆け上がっていった屋上へと向かう。

上階で止まっているエレベーターを待つ余裕は無い。

現場にいた容疑者の西野も、高木の姿を見て思わず追いかける。

自然と相内もその後続いた。

彼ら容疑者を米花署へ連れてきた刑事は予想外のことに、制止することが出来なかった。

高木は、いつもの彼からは想像できぬほどの敏捷さで側に居た多くの刑事達をすり抜け、西野や相内ではなく斉藤だけに狙いを定めてその襟首を掴んだという。

皆が驚く中、呆然とする斉藤をそのまま引つ張って駆け上がっていったそうだ。

流石のコナンもこの事態には焦る。

まさか高木がこんな暴挙に出るなんて思わなかった。

高木の行動の意図を考えるが、色々候補がありすぎて咄嗟には判断できない。

階段を登りながら、隣の佐藤を見上げる。

彼女は、意外にも真っ直ぐに前を向いて等間隔に息を吐きながら走っていた。

しかし、その冷静さが却って危うい感じがする。

——最悪の結果にならなければいいが……

一人小さな体でコナンは大人たちの足元を視界に納めながら屋上を目指した。

四階で騒ぎを聞きつけた目暮や白鳥も合流する。

米花署は五階建てで、数分足らずで太陽の下に出た。

既に前の刑事達によって開かれた分厚い鉄製の扉の向こうに、高木はいた。

雲ひとつ無い青空を背負って。

その表情は逆光で捉えにくい。

少し息を切らしているが、側でもっと肩を上下させ足をかくかくさせている斉藤の比ではない。

しわ一つ無かったダークスーツが台無しだった。

斉藤は大量の汗をかきながら、信じられないといった風に高木を見つめている。

綺麗に分けられていたはずの前髪も若干乱れている。

よほどきつく引っ張られたらしく、彼の眼鏡が屋上の扉付近に落ちていた。

「……高木君」

佐藤が彼を見て、その名を呼ぶ。

声が震えていたのは階段を駆け上がったせいか、それとも。

一方のコナンや他の刑事達は、斉藤の両手首を背後で捻りまとめている彼の左手ではなく、反対の右手を見てぎよっとする。

その手には、拳銃。

「何のつもりだ高木！」

「こんなことしてどうなるのかわかっているのか！」

本庁の顔見知りの刑事が連なって叫ぶ。

大声は、空に溶け込むのごとくすぐに掻き消える。
それを見計らったように、高木は答えた。
なぜか、彼の声は空に通る。

「こうするしかなかったんですよ。これが、最後のチャンスですか」

「チャンスだと？」

「ええ、真犯人を捕まえる最後のチャンスです。僕はこれから捜査には加われないから」

その言葉に、斉藤が引きつった声で言い返す。

「俺が犯人だとしても言うのか」

高木は無表情で斉藤を見下ろす。

同じくらいの背丈のはずなのに、その視線は見下ろすという言葉が合っていた。

「ああ。お前は、昨日梨本に言ったよな。家に帰ったほうがいいと」

梨本は、久方ぶりに帰った家の玄関で、仕掛けてあった銃によって死んだ。

「それだけで犯人扱いする気なのかよ」

昨日容疑者だと自分で冷静に言った斉藤だったが、今は流石に動揺している。

「それだけじゃない。今回の事件には殺人の動機が見つかっていない。じゃあ何故見つからないのか。候補はいくらでもあるけれど、

六年前の事件を踏まえれば絞られる」

周りの刑事の一人がごくりとつばを飲み込んだ。

「今回の犯人はあの事件で何か負い目が出ていた。それを最初の被害者の須地が握っていたんだ。だが須地は犯人に殺された。……犯人は須地ごと犯行の動機を葬ったんだ」

唯一動機を知る人間は、その動機を作った男であり被害者。考えれば自然なことなのだが、それでは後の香川麗子や梨本和文が殺された理由がつかない。

そんな刑事達の考えを読み取ったのか、高木は続ける。

「だけど、須地だけを殺してしまえば彼に動機の原因があると気付かれてしまう。だから、続けて二人の人間を殺した。動機の原因をあやふやにするために」

「だから、なんでそこで俺が犯人になるんだ」

呼吸のし過ぎでむせ返った斉藤が、喉を押さえられないままかすれた声を出す。

高木の理屈で言えば、六年前何らかの負い目を持った人物が今回の犯人となる。

では、高木が犯人に指名した斉藤にはどんな負い目が出ていたのか。

大人たちの足元で、コナンはじつと成り行きを見守る。

「六年前の事件で、雪乃が死んだ日の事情聴取で、彼女と一緒にだったのも須地とお前だ。雪乃が警察署で死ぬ前に会った最後の人間もお前たち二人だ」

高木の話に、その場にいる全員が黙って聞く。
一体何を言いたいのか。

みなのは気持ちはそれにつきた。

「雪乃があんな急に不自然なタイミングで死んだのは、その直前まで一緒に居た人間が何か言ったからじゃないのか？ 須地が殺されたとすれば、そんなことが出来たのはお前しかいない」

事件後すぐに出頭しなかったのに、事情聴取の後寮に帰ってまた警察署に行き、証拠の銃を持って自首して自殺したという違和感。だが、その行動は誰かの手によって糸が引つ張られていたとするなら。

つまり彼が言うところの負い目は、桐生雪乃が死んだきっかけだ。

「随分強引な推理じゃないか。全部状況からの想像に過ぎない。そんなんでは立件なんざできないぞ」

弁護士の斉藤はやつといつもの理性を取り戻したのか、反論する。

「それに、俺が一体何をしたっていうんだ？ 何をどうすれば彼女が死ぬんだよ。」あんたが犯人じゃないのか？ あんたのせいで皆疑われているんだぜ」とでも？ 犯人の目星すら立っていなかったあの状況で、俺が彼女を疑うことは皆無だ。万が一それ以外の言葉で俺が知らないうちに彼女を追いつ込んだとしても、俺は罪にはならないぞ。教授を殺した彼女の自業自得だ」

隙の無い理論で攻める彼に、高木は黙って見つめたままだ。

しかし、自業自得という言葉に西野が黙っていられなかった。

「直さん、教授にも非はあったんだし、それはちょっと言いすぎな

んじゃ——」

「ああ、教授も悪いさ。だがな、そのせいで俺たちが疑われていたんだぞ。そして今回もだ。また容疑者扱いだ。しかも涉にこんな脅しめいたことまでされて」

そこで、はつとしたように斉藤は目を見開いた。

何を思いついたのか、この世のものではないものを見るような目つきで高木を見上げた。

「そうだ、今回も六年前の事件もお前なんじゃないのか」

手首がつかまれたままだが、ひるまずに弁護士の方は高木をにらむ。

「なんだと」

若干、高木の声に震えが混じったことにコナンが気付く。

それに追い討ちをかけるように斉藤が続ける。

「むしろお前が彼女に言い寄っていた教授を殺したんじゃないのか。俺は見たぜ、お前があの日、夜外に出て行ったのを。コンビニに行ったなんて証拠があるらしいが、何かのトリックを使えばどうとんでもなる」

一瞬、刑事達からざわめきが出る。

「そうだそうだ。こんなことをしでかしたお前のほうがよっぽど怪しいぞ」

嬉しそうに斉藤は声を高くした。

はしゃぐという言葉が当てはまる調子で笑う。
例えるなら、小学校の授業で教師の誤植を楽しげに指摘する生徒のような。

「お前が教授を殺して、雪乃を犯人に仕立て上げたんだ。いや、仕立て上げたという表現はおかしいか」

「何を言いたい」

いつもの彼を知っている周囲の人間からすると驚くような低い声で、高木は聞き返す。

さっきまでの立場が逆転した形になりそうだ。

「白を切るなよ。……そうだな、お前がこう言えば、責任感の強い彼女は自首をしてあわよくば自殺するんじゃないか」

その時、高木の目が揺れた。

本当の真実が開かれようとしていることに、コナンも感じ取った。

今の今まで、誰も開けられなかった真実が。
彼女が死んだ、本当の理由。
それが、とうとう。

「『お前のために教授を殺してしまった』ってなあ!!」

——ごめんね……弱い自分で……ごめんね……

三日目、X

『おまえのために殺してしまった』

責任感が強く、高木のことを本気で想っていた彼女なら。

教授の脅しに面と向かって拒絶できなかったことで、高木が教授を殺してしまい、それに対して「弱い自分でごめんね」と謝り、自ら罪を被ったとするなら。

全ての行動に納得がいくだろう。
しかし。

「お前こそ何を言ってるんだ。俺が教授を殺して、そのことを雪乃に言って自殺させたなんて矛盾してるじゃないか」

確かに彼女のためにした殺人だとすれば、彼女に責任を負わせるようなことはしないはずだ。

高木の声には、少し怒りが混じっていた。

「だから自殺させる気は無かったんだろ？　ただ、黙っていられずに正直に言ったら勝手に彼女が責任感じて自殺したんじゃないのか」

目を横に逸らし、斉藤は投げやりに言う。

それに対して高木は掴んでいた両手首に入れる力を強めた。

斉藤の顔が引きつる。

「だったら、今回の事件はどう説明するんだ？　何故俺は今になってこんな連続殺人をしたんだ。お前なら、きつと六年前に雪乃やお前と一緒に事情聴取を受けて寮に帰った須地が、今になって何かに気付いてお前が雪乃の自殺の原因だとわかったから、殺されたと俺

は思ってる」

「それならお前だって須地を殺す理由になるんじゃないのか。それに、その後に起こった連続殺人も、雪乃と教授のことを見て見ぬふりをしていたあいつらに対する復讐になる」

斉藤が犯人なら。

高木が犯人なら。

二人の言い分は真っ向から対立し、交互に目まぐるしく真実が行き来する。

どれが本当なのかわからず、周囲で見守る刑事達は動くことも言葉を発することも出来ない。

コナンも、佐藤も。彼らも動こうとはしない。

それは他の刑事とは違う理由だったかもしれないが。

特に、佐藤の両手はきつく真っ白になるほど握りしめられている。敵を見るかのような鋭い目つきで白昼の修羅場を見つめた。

その視線の先で、容疑者二人の言い合いは続く。

「どうやっても、俺を犯人にしたいんだな。直」

「それをお前が言うのか」

感心するほど弁護士としては最高の理知的さと冷静さで、負けじと反論する斉藤をにらみ、高木はため息をついた。

「俺の部屋に今日小包が届いた。中には、拳銃が入ってた」

その言葉に周囲がどよめく。

「それだと思ったよ。俺を犯人にするために、真犯人から届けられたものだ」

思わず皆の目が彼の手にある拳銃に向けられる。
その考えを察して、高木は付け足した。

「ああ、これじゃないですよ。届けられたやつを使えば本当に犯人にされかねないですし。でも、内勤になって動けない間に拳銃と直の証言で僕が犯人にされることも明白だった」

だから、こんな暴挙に出たということだ。

銃を使い迫ってでも、斉藤から真実を引っ張り出すという強い決意。

高木は刑事達に移していた視線を元に戻す。

「雪乃を殺して、俺をその犯人に仕立て上げようとするお前を許さない。何としてもお前が犯人だと自白させ——」

その時、拳銃の安全装置をはずす乾いた音がした。

屋上で妙に響いたそれに、周囲は高木の手元を見る。

しかし、高木は違う方向を凝視していた。

まさか、といった目で、信じられない、といった表情で。

コナンも声にならない驚きを持って、隣の「彼女」を見上げた。
まずい。

「もうやめましょう、高木君。貴方らしくもない。銃を捨てて」

そう、拳銃をかざしていたのは佐藤だった。
斉藤ではなく高木に焦点を定め、まっすぐに銃口はそちらを向いている。

「あなたも僕を疑うのですか」

絶望的にかすれた声で、彼は搾り出すように言った。

それでも佐藤の決意は揺れない。

「貴方がその銃で誰かを脅すなんて、ましてや撃つなんて耐えられないわ。それなら、いつそ私が貴方を」

恋人同士が銃を持った時。

それが背中合わせではなく、相対している時だったと誰が予想しただろうか？

三日目、X I

佐藤が拳銃を持ったことに注意がいったせいか、高木の斉藤を掴む手が緩んだ。

すぐさま斉藤はその手を全力で解き、刑事達の方へと走った。刑事達が慌てて彼を保護する。

斉藤は刑事達の背中に隠れ、いままで自分を拘束していた男を睨んだ。

これで容疑者とはいえ一般人に害が及ぶことはなくなった。しかし、この状況は先ほどよりも随分悪くなっている。

「佐藤さん、彼をこちらに戻してください。まだ言うことがあります」

「そういうわけにはいかないわ。貴方はきっとその銃で彼を脅すわ。それで自白させたとしても、証拠にはならないのよ」

佐藤は宥めすかすような静かな口調で言う。
彼女の銃口はぴたりと彼のほうを向いたままであり、揺らぐことは無い。

「自白してもしなくても、貴方に有利には働かない。お願いだからあきらめて頂戴」

じつと、高木は彼女を見つめた。

彼らにしかわからない何かが、その視線の中にはあるのか。

「僕が犯人だ、と思っているんですか」

「……ノーとは言えないわ」

二人は目を合わせ、黙ったまま暫く時が流れる。
それは数秒ほどだったかもしれない。

しかしその場の人間達には、一時間近くにも感じられた。
晴天に、一つ雲が流れてくる。

太陽の前をそれが通り抜けるころ、屋上にも影が出来る。

その時、今まで逆光で見えなかった彼、高木の表情がほんの少しだけ見えた。

案外落ち着いているように、コナンには受け取れた。
そして。

「これ以上僕がこんなことを続けるのなら、あなたは僕を撃ちますか」

「ええ」

今度は、躊躇い無く佐藤が頷いた。

あまりにも覚悟を決めた返事に、高木は苦笑する。

それはいつも見せている、あの困ったような優しい笑顔。

見慣れた表情に、コナンは全てを悟った。

彼のこれからしようとしていることが。

「そう、ですか」

彼は数歩後ろに下がった。

一寸下は、六階下のコンクリート。

「何を考えているんだ！」

そこでついに、珍しく白鳥が叫んだ。

叫んだ言葉とは裏腹に、高木の意図を悟り、危機感を持ったからだ。

隣で目暮はじつと佐藤と高木の一挙一動を、一瞬たりとも見逃さず見つめている。

斉藤と相内はひどく狼狽し、西野はうろたえずとも血の気が引いた顔をした。

この三人には、「あの時」のフラッシュバックが起きているのかもしれない。

他の刑事達は白鳥と同じく、彼の立つ危うい場所にはっとして「思いなおせ」と説得し始めた。

しかし、そんな言葉が高木の、そして佐藤の耳にも届くことは無く。

「佐藤さん」

存外明るい声で、まるでそこがいつもの捜査現場のように、高木は声をかけた。

彼女は返事をしない。

「あの時もね、こんな青空だったんですよ」

高木はその手に持つ拳銃を自分のこめかみに当てた。

「僕が捕まれば犯人にされる。真実は明らかにされず雪乃は浮ばれない。……とはいえ、ここで粘って貴女の手を汚させるわけにもいきません」

全ての者が息を呑んだ。

佐藤も、目暮も、そしてコナンも。

「弱い自分で……すいません」

彼が銃を発砲したのと、屋上から転落したのは同時だった。

その血しぶきは、まるで空を撃ったかのような。

六日目、I

その後の出来事は目まぐるしく過ぎていった。

高木が銃で自分の頭を撃つて屋上から落下したことは、警察署内だったこともあり秘密裏に処理された。

自殺とはいえ、彼が犯人である証拠はまだはっきりとはしていないからだ。

彼が発砲した瞬間、佐藤は銃を持ったままその場にへたり込んだ。何も言わず、ただ呆然と。

周囲の刑事達が駆け寄って落ちたその場所を見下ろしていたのは反対に、

彼女は空を見上げていた。

その次の日。

容疑者三名は、強制的に中止になった事情聴取を再び行うことになった。

西野は未だに今回の出来事が信じられないらしく、時たま涙を見せ供述が出来ないほど声を詰まらせることもあった。

相内は西野ほどではないが、流石にショックを受けているようで顔色が悪い。

そして、斉藤。

彼が一番取り乱していた。

興奮していたといっても良いかもしれない。

「俺があいつを殺したのか！？ なあ！？ 俺は本当のことを言っただけだぞ！」と逆に刑事に詰め寄るシーンもあった。

確かに、彼は高木に対してあの場で何かをしたわけではない。

言っただけだ。

「お前が犯人なんじゃないか」と。

それで追い詰めたというなら、その後に銃をかざした佐藤のほう

がよっぽど追い詰めたように見える。

しかし、警察は彼を六年前の事件のことを踏まえ慎重に調べた。高木が言っていたことも一理あるのだ。

六年前雪乃に何かしら自殺させるようなことを言って、それを今になって須地や他の被害者たちに追及されたとしたら。

雪乃を自殺に追い込んだこと自体が犯罪ではなかったとしても、弁護士という立場上社会的制裁を恐れ犯行に及んだ可能性もある。

勿論、あとの二人も六年前雪乃と一緒にいなかったとはいえ同じくらい可能性はある。

そして高木にも。

屋上で言っていた通り、彼の部屋から小包と拳銃が押収されている。

殺された三人を撃った拳銃であつたと証明された。

犯行のあと、郵送されたものだという。

ガラガラ声の男から電話で依頼されたバイク便の業者が、無人のマンションの一室から小包を預かって配達したそうだ。

容疑者が高木に罪を着せるために郵送したものなのか、逆に高木がこんなことをする人物が犯人であるはずがないと思わせるためにしたものなのか。

共通して言えるのは、六年前の雪乃の自殺に関与した人間が今回の事件の犯人である可能性が非常に高いということだ。

数日後、容疑者三名の一通りの聴取が終わった。

あとは刑事達のこれからの捜査に全てがかかるのである。

三名が帰った日の深夜、佐藤は誰も居ない捜査一課の片隅で、あのデスクの前の椅子に座っていた。

そこは、まだ何も手をつけられていない「あの日」のままの
高木のもの。

彼に拳銃をかざし追い詰めたことに対して、数日間彼女も内勤命令が出ていたのである。

それも、今日で終わる。

暫くの間彼の椅子に座ったまま、デスクに飾ってあるミニチュアの車を指先で転がした後、徐にポケットからあるものを取り出す。

彼から以前貰った指輪だ。

これを渡したときの彼の心境はどんな感じだったのだろうか。

あのときには、全て彼の中では片付いていたのだろうか。

いや、違う。

彼女は心の中でかぶりをふる。

片付いていないからこそ、渡したのだ。

かといって、彼はあいまいな気持ちでこんなことをする男ではない。
い。

それでも渡したということは、片付いてからでもこの気持ちは変わらないという決意があったから。

これはうぬぼれではない。

「信頼」だ。

彼女は意を決して彼の椅子から立ち上がった。

真実への扉は、すぐそこまで来ている。

六日目、ⅠⅠ

俺は六年前の本当の真実に気がついていて。

お前が何をしたかも、全部だ。

この前、お前が女と歩いているところを見た。彼女かい？

六年前あんなことをしてかしておいて良い度胸だ。

黙っていてほしければ、金を用意しろ。そうだな、額は――

深夜のあるマンションの一室から、明かりもつけずに聞こえてくるプリンタの音。

脅迫めいた文章が一枚の紙に映し出されていく。

息が荒くなるのを抑え切れない。

まさかこんなにスムーズにいくとは思わなかったのだ。

途中ひやりとさせられたが、結果オーライといったところか。

数日前、彼が「彼女」と全く同じ背景で死んだあれを見て以来、

自分の中でふつふつと湧き上がる興奮は何事にも変えがたい快感だった。

初夏の室温のせいもあるが、それ以上に快感が体中の汗を促す。

それに頭もニット帽を被って髪の毛を落とさないようにしているので、体感温度は室温をはるかに越えている。

顔面に滲み出る水分の量に気付き、床に滴り落とさないよう、拔かりなくタオルで顔を拭いた。

六年前と言い今回と言い、自分には勝利の女神とやらがついていくかもしれない。

過去の忌まわしい記憶を辿り、頭が痛くなりそうになる。

だがそんな苦しみ続けた人間に、女神はちゃんと微笑んでくれるのだ。

今までの不運を補って余る位の幸運が待っているのだ。
これで終わる。
全てが、やっと。

「俺は賭けに勝ったんだ」

自分一人しかない部屋で、口角を上げて呟いた。
印刷が完了して、紙がプリンタから押し出される。
それを手袋をはめた手で慎重に取って、プリンタに接続していた
USBメモリを外そうとした。

これはどこか見つかりにくいところに納めておこう。
見つからないところではなく、見つかりにくいところへ。

この部屋全体を包む本棚の端にでも入れておこうか。
その内警察が見つ付けてくれるだろう。

歓喜の震えを手のひらに響かせ、宝石に触れるような恭しさでメ
モリを指先にはさむ。

賭けの後には、賞金が出る。

このメモリこそが、その賞金。

「あら、賭けをしたのはあなただけじゃないわよ？」

突然、女の声がした。

息が止まるほど驚いて、慌てて声のしたドアのほうに目を向ける。
まさか、ここには自分しかいなかったはずだ。
視線をさ迷わせていると明かりが灯される。

明るくなった部屋の中で、彼女がドアの側にあったスイッチを押したのだとわかった。

「彼を犯人にする決定的証拠をいつか作るだろうとは思っていたけど、まさかこんなに早くやってくれるとは思わなかったわ」

好戦的な目で、女は座っている自分を見下ろす。
思い出した。

この女は、数日前彼を運よく自殺に追い込んでくれた刑事だ。

「USBメモリの存在に気付かなかった私達警察も情けないけど、あなたはもっと情けないわよね」

予測していなかった事態に、口を開けたり閉じたりすることしか出来ない。

女神は自分に微笑んでくれなかったのだろうか。

「それで、あなたは須地さんの部屋で須地さんのUSBメモリで一体何を印刷していたのかしら。……斉藤直さん？」

佐藤は語尾を強めてその名を言った。

女神のような美しさは、凄みがあるほど恐ろしい怒気を含んでいた。

六日目、IIII

斉藤は決定的な場面を目撃されたことで、何もいえないようだった。

力が入らないのか、座ったまま立ち上がらない。

目を見開いて、USBメモリを持ったままの状態で彼女を見上げている。

もう片方の手にある印刷された紙を、佐藤は引き抜いた。

「なるほど？ 高木君が須地さんに六年前のことで脅されていたという証明が出来れば、彼が犯人であると断言できるってわけね」

紙面の文字をざっと見て佐藤は淡々と話す。

「これは私の推測だけど、上から三行目にある、多分私のことを言及しているこの一文は、後からあなたが付け足したものかしら」

”この前、お前が女と歩いているところを見た。彼女かい？”

この一文を斉藤が付け足したものだと言った彼女は言う。

つまり、それ以外の文章は。

「そして、付け足される前の文章は須地さん本人が打った。――あなたを、脅すためにね」

斉藤は肩をびくりとさせた。

「あなたは六年前の事件に関することで、何かしら後ろめたいものがあり、それを須地さんから脅されていた。それで彼を殺そうと思ったあなたは、自分の代わりに高木君を犯人に仕立て上げようとし

た。六年前のことで、高木君にも須地さんを殺す理由が来ているものね」

高木の犯人の場合、雪乃が教授に迫られていることを黙っていて見殺しにしてしまったことに対する恨み。

一見合点がいく理由になる。

「そこで問題になるのは、あとの二人の殺害理由。香川麗子さんと梨本和文さんね。この二人をあなたが殺す理由が、私は最後までわからなかった。高木君なら、須地さんの時と同様の理由で犯行に及んだと思わせられるけど。そんな背景すらも計算してあなたは二人も殺害した」

何とも身勝手で残忍な殺人だ。

だが、その身勝手さは更に輪をかけることになる。

「でも、高木君を犯人に仕立てあげるためだけに二人を殺害したわけじゃないはずよ。毎日一人ずつ殺した、その異常なスピード。これにはちゃんと理由があつた」

連日の犯行はリスクを高める。

それでも毎日殺したワケ。

最後の最後で、それに佐藤は気付いた。

高木は、もっと早くに知つたのだろっが。

「あまりのスピードに警察が警戒を強めるのは明白。たいした証拠も無いうちから高木君を内勤もしくは拘束させることが、あなたの真の目的だったのね」

当たっているのだろう。

斉藤は床のある一点を見つめたままうなだれている。

だが、身内の高木を拘束するということは、自分を含めた他の容疑者も当然同じ立場になるはず。

それでも斉藤は連日の殺害を実行した。

自分が拘束される前に、ちゃんと高木を追い込む材料を用意しておいて、だ。

「高木君が自由に動けなくなった状態で、彼の自宅に拳銃を送りつける。そして、六年前の事件と今回の事件における彼の犯行動機をあなたが警察に言う。この前、あなたが米花署の屋上で高木君に言ったようなことを」

警察は、自分の恋人を見殺しにした事に対する復讐として高木が犯行に及んだと思っっているかもしれないが、本当は違うのではない。実は彼は六年前教授を殺し、雪乃を追い詰め自殺させてしまい、さらにそのことを須地に脅されでもしていたのではない。他の二人は須地を殺す動機のカモフラージュとして殺されたのではない。当時を知る、そんな斉藤の証言を警察は無視できないはずだ。

しかも、警察が予想している犯行動機の裏をかく動機を提言することにより真実味が増す。

「弁護士のあなたは、自分が早いうちに拘束から解放される自信があった。解放された後で、今のよう須地さんの自宅に高木君を脅す文章が出てきたとすれば、もう彼は逃れられない」

自分宛に書かれた脅迫文に一文を付け足して、違う人間宛にしよう。

何とも巧妙且つ計算高い行動だった。

たった一行の捏造で高木を犯人にさせてしまえるのだから。

複雑に絡み合う推理と事実の間で、その計算高い男はあざ笑うかのように口をゆがめた。

「そこまでわかっていたとしても、もう涉はいないぞ」

床に俯いたままだったが、そこでやつと斉藤は呟いた。
彼女に対する、というよりこの現実に向けた嘲笑だった。

「確かに俺は六年前、彼女が教授に迫られていたのを知っていたから、”お前がもしかして殺したのか”と事情聴取の帰りに言った。そしたらあいつは警察で自白して自殺した」

眼鏡の位置を右手で直し、言葉を続ける。

「それを六年後の今、須地から問い詰められた。金の強請りつきでな。しかも、払わなければ六年前の事件も、犯人の彼女に俺が”教授殺しをばらされなくなったら金を渡せ”と脅したことに言いふらすと言われた。自分が強請っておいて、よく言ったもんだぜ」

斉藤は、顔は下を向いたまま上目遣いで佐藤を見た。

「三人を殺した罪は認めてやる。だが、涉の自殺に関しての罪は俺には来ないと思え」

立場は逆のはずなのだが、まるで判決を言い渡すかのような彼の言葉に、佐藤はこぶしをぐっと握り締めた。

次に彼女は、斉藤を見下ろして冷たく言う。

「あら、殺したのは三人だけかしら」

彼が怪訝な目を向ける。

「だから、涉は勝手に死んだんだ。俺が殺したんじゃない。追い詰めたのは俺でも、死を選んだのはあいつだ。それにこれからの供述の仕方によつては、涉に関する俺の罪はどこまででも軽く出来る」

あまりに卑劣な発言である。

佐藤は深々とため息をついた。

少し間をおいてから、彼女は眉をしかめて彼を睨んだ。

「私は高木君のことを言ってるんじゃないわ」

その場に他の人もいたとすれば、何のことかわからない台詞だ。しかし、そこで斉藤は俯いたままの顔を思わず上げた。

「雪乃さんを問い詰めたとか、須地さんにそのことで脅されたとか、よくもまあ、これだけ口が回るものね」

それこそため息が出るほど呆れてしまうくらいに。

佐藤はすつと目を細めた。

「あなたは、雪乃さんが」お前のために教授を殺した」と高木君に言われたから、責任を感じて彼を守るために自殺した、とこの前言ったわ」

それは屋上で高木に言い返すためについた嘘、だったことになる。更には、そんな展開にならなかったとしても、高木が拘束されてから彼をはめる為に用意していた供述でもある。

本当は今この場で斉藤が証言したとおり、雪乃が教授を殺し、それを彼に問われたため自殺したということだが。

しかし。

「あっちの言葉のほうで、案外真実に近かったんじゃないかしら」
彼の頬に暑さのせいではない一筋の汗が流れる。

「あの言葉を聞いたとき、絶望感みたいなものがあつたわ」

だからこそ佐藤も、そして「彼」も無意識のうちに避けてしまっていた。

「……真実に近いだけで、本当はもう少し違うけど」

齊藤に罪を問われたから死んだわけではなく。
高木に罪を告白されたから死んだわけでもなく。
桐生雪乃が死んだ、本当の本当の理由。

「」高木渉がお前のために教授を殺した”」

佐藤ではなく、もう一人の声が第三の事実を言った。
彼女の後ろから来る人影に、斉藤は声にならない声をあげる。

「雪乃はお前にそう言われて自殺したんだよ。俺のアリバイであった、コンビニへ行くために宿泊所を出た姿を、教授を殺しに行く姿だと誤解した上でね」

高木は、あまり表情のない顔で本当の真実を口にした。

「……本当は、お前が教授を殺したのにな」

高木が犯人だと信じた彼女は、彼のために死んだ。
そしてそれは結局彼ではなく真犯人を守ってしまうことになった。

こんなに哀しく皮肉で情けない真実に、向き合えるまで六年間の
歳月が要ったのだった。

六日目、I V

佐藤が出てきたときよりも、それこそ目玉が零れ落ちるのではと
いうくらい大きく見開き、斉藤は彼を見上げた。
座ったままでも、腰が抜けているのがわかる。

「どう、して」

その四文字を言うだけで斉藤の声はからからになった。

対する高木は、ため息を一つつく。

そして佐藤を見る。

彼女は無言で頷き、彼も頷き返した。

ここからは、彼の役目だ。

「俺が撃った瞬間屋上から落ちたのは見てるよな。いや、厳密に言
えば落ちる瞬間撃った」

わずかの差だが、そこが雪乃の場合と大きく違うところだった。

「落ちるとき、俺は後ろに傾く。その時いた人間は俺の正面を見な
いことになる。俺はこめかみを撃ったんじゃない。後頭部の髪の中
に隠してた血糊を撃ったんだ」

そう、屋上から落ちる寸前で彼は、銃口をこめかみから一瞬後ろ
にずらしたのだ。

そのずらした場所にあるのは、薄くて小さな血糊の袋。

「本当に小さな袋だったけど、血糊をつめこんだそれに発砲すると、
案外勢い良く飛沫はあがるもんなんだよ」

見えない後頭部に向けて銃を撃つ。

相当な技術と勇気がいるが、それを高木はやったのである。

しかも彼はそのまま後ろ向きに屋上から下に落ちた。

並みの覚悟ではない。

「でも屋上から見下ろしたとき、地面には落ちたお前と血だまりが」
「あれはダミーさ。俺が設置してあったトランポリンに落ちてから、俺と同じ格好になった機動隊の人に落ちた振りをしてもらったんだよ」

トランポリンに身を沈めるや否やすぐに撤収して、先に用意しておいたダミーを使う。

屋上から見下ろせば、容易に本人だと思い込ませられる。

それも、刑事ではなく素人なら。

その代わり、一部の人間に手伝ってもらわなければならない細工だったが。

「お前から銃が送られた後、目暮警部から電話があつてね。内勤を告げる内容だったけど、逆にこちらから提案したんだ。」僕が死んだ振りをしたら、僕を罪をかぶせようとしている真犯人はきつと尻尾を出す」と

つまり目暮は今回の狂言を知っていたのだ。

彼に機動隊などの手配をしてもらってから、高木はあんな暴挙に出たということになる。

「予定では目暮警部から説得されてそれでも応じなくて、そのまま進退窮まって自殺という形——だったけどな」

後ろにいる佐藤を横目で見ながら種明かしをすると、視線を感じて彼女は苦笑した。

その予定を狂わせた張本人だからだ。

「実際それでやると少し無理があるとわかっていたから、あそこで佐藤さんが俺の意図を察して一芝居打ってくれて良かった。おかげでお前は俺の死を信じきった」

恋人同士の強い感情のもつれ合い。

少々過剰な展開でも、ゆがんだ愛情として受け止められるだろう。斉藤は数日前の修羅場が偽りだったと今でも思えず、口を開けても言葉が出てこない。

何かを言おうとしても、頭が追いつかないのだ。逃げないことを確認して、高木は続ける。

「犯人っていうのはね、思った以上に自分に有利な方向に事が進むと不安以上に興奮が勝るものなんだ。元々人も殺しているし、その興奮状態は常では考えられないほどだ。——こうやって、聴取を受けたその日のうちに、被害者の家にやってくるくらいだからな」

しかも須地を殺したときに彼から奪った、脅迫文の入ったUSBメモリを持ってきて。

証拠品をもって刑事が張り込んでるマンションに行くという失態を、いつもの冷静な斉藤ならしなかったことだろう。

それだけ、高木が目の前で自殺したシーンが彼に影響を与えたということだ。

そこまで言い終えると、高木は座り込んでいる斉藤と同じ目線になるようにしゃがんだ。

「ここまでが狂言の真相。そして今回の事件におけるトリックは佐

藤さんが話してくれたけど、お前から言いたいことはあるか？」

いつもと同じ柔らかい声だが、どこか鋭さを隠し持った目で高木は斉藤を見る。

斉藤はつばを飲み込んで押し黙った。

急に重苦しい沈黙が降りかかる。

何を言っても、自分が犯人であることには違いなく、真相は全て暴かれている。

罪が軽くなることは万に一つ無い。

しかし、そのまま動こうとしない目の前の刑事との間の空気にたまらなくなり、口を開いた。

「さ、最初から俺が犯人だと知っていたのか」

彼は腰で一メートルほど後ずさりする。

それを佐藤も高木も止めはしない。

彼がどんな行動を起こそうとも、それを強制的に止める手段を二人は持っているからだ。

その手段を使わなくても、今の二人に気圧されて出来ないだろうが。

彼の質問に高木はそこで始めて表情を出した。
眉を若干ひそめる。

「確信したのは覚悟を決めて六年前の捜査資料を見た時だったよ。……だけど、俺が認めたくないだけで、もしかしたらもつと前からどこかで気付いていたのかもしれない。とはいえ、お前を犯人だと決めてしまうと、その時点で雪乃が死んだ理由も認めてしまう」

高木のために死んだ。

しかもそれは斉藤によって仕組まれたことで、結局彼女の死は無

駄だった。
そして。

「雪乃が俺が人を殺したと信じ、俺はそのことを信じなくなかった」

佐藤はその時西野誠司の言葉を思い出した。

六年前、高木は雪乃が教授を殺したのではなく、自殺したことにショックを受けていたのではないか、というあのことを。

彼がショックを受けたのは、本気で想っていた人が自分を人を殺したと思い込み、且つその想い人も自分を想っていたからこそ死んだということだった。

本当に愛していたから。

本当に想っていたから。

だから雪乃は自殺した。

だから高木は認めなかった。

それは本当に、正しい恋だったのだろうか？

「いや、雪乃だけじゃないな」

高木はどこか遠いところを見るように呟く。

「かく言う俺も、あの時雪乃が犯人じゃないと断定できなかったから、自分のアリバイを言えなかった。俺のアリバイが証明されれば、その分他のゼミ生……雪乃へかかる容疑が強まってしまう」

あの時アリバイを証言していれば、彼女は死ななくてすんだのに。

「彼女を救えず信じ切れなかった俺も、本当の意味で真犯人だったんだろうな」

まだ幼かった、といえば合点がいく。

だが、高木も雪乃も弱かったというのもまた真実だったのかもしれないのだ。

勿論、西野も相内も殺された三人も。

それぞれが別の事実を知っていたにもかかわらず、見てみぬふりをした。

全ての人間の弱さが、六年前も今回も引き起こしたとっていい。

佐藤は思わず目を閉じ、人知れず息を吐く。

あまりにも、どうしようもなく、悲しくて哀しくて。

六日目、V

何ともいえぬ重苦しい雰囲気が部屋全体を纏う。

どうしていいのかわからず、とりあえず俯いたまま前を向こうとしない斉藤に、高木は呆れたように肩を落として、次に立ち上がった。

そして、敢えて最後までとっておいた質問として、全ての始まりを聞くことにする。

「そもそも、お前が教授を殺した動機はなんだったんだ。そして、雪乃を誘導し罪をかぶせたわけも」

それがわからなかったからこそ、六年前FBIも彼を犯人と突き止められなかったのだ。

ここまでの犯行を見る限り、彼の執念や計画性は異常だ。

恩師を殺して同期を犯人に仕立て上げたり、三人の同級生を連日殺してさらに同じく同級生に罪をかぶせようとした。

何が彼をそこまでの凶行に至らせたのか。

本質に関する問いに、斉藤はくつと自嘲気味に笑った。

「彼女、桐生雪乃と一緒にさ」

そこで初めて、斉藤の目に炎が灯ったように佐藤は感じた。

眼光が先ほどまでと全然違う。

「一緒？」

「ああ、俺も教授に脅されていた。俺の場合強要されたのは論文の横領だったけど……」

自分の動機を証明することになるせいで、今までずっと黙っておくしかなかったことをついに言えるという開放感だろうか。

斉藤は吐き出すようにぺらぺらと話し出した。

「あの男は俺の論文をばくつたのさ。高名な教授も年には勝てないんだろ。俺がその横領を問い詰めたら、いきなり学士をやらなといいやがった。」素直に論文を渡せば学士はやる。院への推薦状も書いてやる。その代わり院へ行っても論文はよこせ。お前の力を認めているからこそその提案だ。」そうは言うが、それで俺に残るのはなんだ？ 卒論たった一本だけか？ 俺が何のためにアメリカに行ったというんだ。ジジイの名誉を上げるためか？ ふざけんな」

大学内で非常に強い権力を持つ教授に逆らえなかったと彼は言う。それはそれで同情の余地がある事実だ。しかし。

「それで雪乃さんを自殺させていいってわけじゃないわ」

抑えきれず佐藤が諫めた。

それに発破をかけられたように、斉藤は言い返す。

「俺には論文を渡すしか手段が無かった！ でもあいつは女というだけで解決できたんだぞ！ ちょっと我慢してジジイの相手をしてりや奨学金も学士も名誉も全部手に入ってたんだ！！ なのにあいつはプライドやら世間体を気にしてぐだぐだ伸ばしてやがった！ 俺が出来ないことを出来るくせに、甘っちょろいんだよあのおん」

その時、側にあつたテレビの画面が割れる鋭い音がした。

佐藤が足元のそれを蹴ったのだ。

ストッキングしかはいてないのに怪我もせず見事な蹴りだが、彼

女は震えている。

何とも勝手に自己中心的で、でもどこか彼のせいだけではないことに、彼女は感情の行く先を見失ったからだ。

女刑事の本気の蹴りに、斉藤が息を呑んで恐怖の目で彼女を見上げる。

何かを言いたげに佐藤は口を開こうとするが、それを高木が手で制した。

不思議なほど冷めた目で、高木は昔の想い人に暴言を吐いた男を見下ろす。

「……それで、男の自分とは違い全てを解決できるにも関わらず対処を決めかねていた雪乃に嫉妬して、教授殺しの罪をかぶせたのか」

斉藤は彼の静かな態度に戸惑う。

佐藤以上に怒ってもおかしくないはずなのに。

「あ、ああ、そうだ。幸運にも、明日のカリキュラムの確認で彼女と一緒に教授の部屋に行く途中、窓からお前が外に出て行くのを見たしな。あの時はただ買出しにでもいくのかと二人で言っていたが……」

高木のじつと聞く姿勢に逆に恐ろしさを感じてくるが、黙ればもつと恐ろしいことが起こる気がして、彼はつばを飲み込んだ。

嘘をつくことは許されない空気だということもわかる。

目の前の刑事の静かな視線に耐え切れず、目を背けたまま続けた。

「あの後、こっそりもう一度教授の部屋に行って、論文の件を再度頼み込んだが断られた。そして我慢しきれず咄嗟に側にあった銃であいつを殺した時、思いついたんだ。彼女も教授から脅されていることと、さっき渉を二人で目撃したことで、俺は犯人にならなくて

すむんじゃないかと」

癖なのだろう。この場でも斉藤は眼鏡のフレームをくいと上げた。しかし、暑さだけでない、何かからのプレッシャーに汗が止まらず、フレームは再び定位置からずれた。

そのことに彼は気付いていない。

いや、気付く余裕も無かった。

無言の圧力を眼前でかけられて、斉藤には真実を話すことしか頭に無かった。

「俺は好機を待った。彼女に高木の犯行だと信じ込ませる機会を」

その真実は、事件の数日後に起こる。

「俺と彼女と須地が事情聴取に呼ばれた後、入れ違いにお前が単独で警察に呼ばれることを知った。その時がチャンスだった。俺は聴取から寮に帰った後、お前の部屋に忍び込み拳銃を隠し入れた。そして彼女と一緒に前前の部屋に言ってくれるよう頼んだ。以前涉の部屋に忘れ物をしたが、急に必要になってしまった。だから合鍵を持っているお前に鍵を開けて欲しい、と」

雪乃は承諾して、彼の部屋を開けた。

いつもそうやって合鍵で高木の部屋に来ていたのだ。

しかし、その日斉藤とともに入った彼の部屋で見つけたのは。

「上手く誘導させて彼女に拳銃を見付けさせた。あいつは戸惑っていたよ。もしかして涉が犯人じゃないかって。それはあいつ自身薄々感じていたせいもあるかもしれない。俺がその場で、犯行の当日涉が外に出ていたことに言及し、ついでに教授からの脅しを実は彼も知っていたと嘘をつく、彼女はすっかり信じ込んでしまったぜ」

雪乃は思っただろう。

皆に口止めしたとはいえ、彼にも教授の脅迫が知られていたら。自分のことを想っていてくれる彼がどんな行動を起こすか。

そして実際に目の前にその凶器が彼の部屋に転がっていて、更に犯行の日に単独で外に出た彼を照らし合わせるなら。

事件自体でショックを受けていた彼女が、斉藤の誘導ですんなりと信じてしまう可能性は高かった。

「まさか自殺までするとは思わなかった。せいぜい凶器を持って自首して、高木の罪を被るぐらいだと思っていたが……彼女の生真面目で責任感の強い性格を考えたら不思議ではなかったがな」

あまり罪悪感の無い顔つきで斉藤は苦笑する。

あの時も、今と同様あまりにも上手く事が運びすぎて興奮していたのだろうか。

佐藤はそんなことを思った。

「六年前はそれでよかった。彼女が全部負ってくれたおかげで俺は学士も名誉も得ることが出来た。これは神から恵みだと思ったね。今までジジイのせいで才能を腐らせてきた俺への、天からの授かりだ」

元々、教授が横領するほど才能が彼にはあったのだ。

帰国し、弁護士になってから本領を発揮するのは明らかである。

「だが裁判つながりで関係を持った政治家から、政界へのお誘いがあった時に、突然親父の政治家秘書をやってる須地から連絡が来た。それが、今あんたが持つてる脅迫文さ」

『俺は六年前の本当の真実に気がついていて。お前が何をしたかも全部だ。六年前あんなことをしてかしておいて良い度胸だ。黙っていてほしければ、金を用意しろ。そうだな、額は――』

高木に罪をかぶせるために付け足した一文を抜けば、こういう文になる。

話を振られた佐藤は手に持つ印刷文を読んで納得した。

何がきっかけだったのかはわからないが、須地は元々彼が六年前の犯人かもしれないことに気付いたのだ。

それは六年前のそのときではなく、後々時間がたち事件を整理することによって。

そんなとき、その犯人が政界に興味を示した。

斉藤と言う男は、脅すには格好の獲物だった。

「六年前も今も俺は結局脅されるのさ。どれだけ逃げても、きっとそれはついて回る。……だから、もう全部嫌になった。六年前のことを全て消し去ろうと思った。あの時の関係者を殺して、且つ犯人に仕立て上げてやろうと思った」

最初は、彼も被害者だったはずなのだ。

教授に理不尽な強要をされて、苦しんだ。

いつのまに彼はそこから加害者へとなったのだろうか。

高木も佐藤も、心中にある疑問は一緒だった。

六日目、V I

全てを聞き終わり、高木は息を吐いた。

深い深い、でも短く膿を出すだけのような息を。

対する斉藤はもう何をしても無駄だと悟り、座り込んだまま動こうとしない。

少しの間、沈黙が流れる。

二人を交互に見て、佐藤は外で待機している刑事達にそろそろ声をかけるべきだろうかと思った頃、ようやく高木が一步踏み出した。斉藤がおびえたように、さらに後ずさる。

「わかった。もういい」

だが、彼の口から出た言葉はあっさりしたものだった。

一発くらい殴っても上は何も言わないと思うが、その態度に佐藤の背筋にむしろ冷たいものが流れた。

「なあ、なんで俺がお前に何も言わないかわかるか」

すっかり素の状態の言葉遣いで高木は聞く。

びくびくしながらも、斉藤が首を横に振った。

すると、高木は再びしゃがみこんで、今度は後ずらせまいと斉藤の胸倉を掴んだ。

そうして、ぐっと掴んだ手に力を入れた。

恐怖で斉藤の目が泳ぐ。

途端更に力が強まって、声にならない悲鳴が彼の口から空気ですられる。

彼は力が入った意味を悟って、渋々眼前の男と目を合わせた。高木の顔には、さっきまで無かった険しい目つきがあった。

何をされるのかわからず、斉藤は視線を交えつつ恐怖で涙が出そうになる。

やはり殴られるのだろうか。

それともまた脅されるのだろうか。

何をされても何も出来ない立場だからこそ、恐ろしい。

斉藤の震える息遣いだけが、暫く部屋に響く。

それは先ほどの沈黙よりも長かった。

今度は佐藤も大人しく黙って見守る。

そして、口を開いたのはやはり彼で。

高木は低く静かに告げた。

「一生、それを考えろ」

その言葉に、斉藤は力が抜けように手を床に落とし、佐藤は驚いた。

彼女の側で高木はすぐに手を離し、立ち上がる。

「考えることをやめるのは許さない。やめた時どうなるかは——わかってるな」

あまりに静かな命令に、された本人はがくがくと頷いた。

「俺もずっとこの事件のことを考えていく。六年前のことも、全部含めて。だからお前も一生をかけて考えていくんだ」

殴られなかったことに、脅されなかったことに安堵しすぎて、高木の言葉を完全には理解していないかもしれない。

だが、暫く経ってから斉藤は気付くだろう。

それは懲役よりも苦しいことだということに。

それでも、人の弱さによって死んだ者への償うには、その弱さと向き合うしかないのだ。

冷静な態度とは裏腹に、震える高木の拳が泣いているように佐藤には見える。

無意識のうちに、その背中にぼんと手を当てた。

彼の背中が、とても熱かった。

七日目、I

「へえ、本店の人らもやる時はやるやんか」

「ああ。俺はあの人たちを結構買っているんだけどな」

高木と佐藤、そして須地のマンション前に張っていた刑事たちによつて斉藤が逮捕された翌日、平次は相談に乗った礼も含めてコナンから電話を受けた。

先ほどの彼の言葉は、高木の狂言やそれに合わせた佐藤の行動を聞いての感想である。

ちなみに本店とは、本庁のこと。

「ほなら、あの佐藤っちゅう刑事は何も知らなかったのに勘で高木刑事のやりたいことに気付いたんか」

「そうらしいぜ。俺も流石にあの時は驚いたよ。高木刑事の真意には途中で気付いたけど、まさか佐藤刑事が銃構えるとは思わなかったしな。ま、おかげでリアルさが増して、他の刑事すらだましてしまうほどの出来栄になっただけ」

高木が投身して、斉藤含む容疑者三名がとりあえず中に連れて行かれた後、目暮は混乱していた周囲に大声で言った。

「うるたえるな、あれは狂言だ」と。

驚く周囲をよそに、暫くしてからけろりとして出てきた高木に、白鳥が無言でその頭をどついたのは見物だったとコナンは言う。

彼にしては非常に珍しい行動だったが、その拳は現場に居た全員の気持ちを表すものである。

高木もそれをわかっていらからこそ、拳を大人しく受けて謝っていたそうだ。

「でもまあ、なんちゅうか後味が悪い感じの犯人やったようやな。全くの自己中心的な犯行では無いし」

携帯を頬と肩ではさんで、学生かばんのロックを閉めた。

今日は休日だが、昼から部活があるのだ。

竹刀を袋に入れつつ、彼はあまり明るくない声で言う。

「あと、六年前の事件では、高木刑事はちゃんとアリバイがあったんやろ？ それをすぐに警察に言わんかったのはやっぱり……」

雪乃が信じ込むきっかけとなった彼の外出は、警察が調べてからわかったことである。

高木自身はそれまでずっと黙っていた。

その理由は聞いていないが、恐らくきつと。

「そうだな。自分のアリバイが証明されれば、それだけ他の者達への容疑が強まることになる。……桐生雪乃さんへの、容疑も」

コナンの言葉に、平次はため息をついた。

袋の紐をしばってベッドに腰掛ける。

「お互いがお互いを犯人かもしれないと思っとなつたわけか。やるせないにもほどがあるな」

想いあっていたからこそ起こった事件。

悲劇と言う二文字で表すには複雑すぎた。

「だから、真実からどんどん遠ざかっていったんだ。誰もが互いを信じる事が出来ず、真実から目を背けた。次に、その扉が叩かれるまでの六年間ずっと」

小五郎が仕事で、蘭が部活でいなくなった事務所で、コナンは窓を見上げる。

今日は少し雲があるようだ。

「今回は俺も色々考えることがあったよ。多分、忘れられねえ」

特に、佐藤が銃をかざし高木が投身したあの場面は。

あれは絶望に見えて、実は信頼と言う絶対的な思いによって作られたシーンだったのだ。

「自分たち」は、あの二人ほど心が強くあるだろうか？

コナンは内心、そうであってほしいと願った。

「……そうか。ま、暫くはお前も休めや。結構気疲れしたんとちゃうか」

自分と関わりが深い人間の感情が強く絡み合った殺人。

コナンは真実を探し出し佐藤の背中を押したただだったが、そこに至るまでに使った気力は自分が推理ショーする時の少なくとも倍はあった。

なので彼の労いにコナンは強がらず素直に頷く。

「そうかもしれないな。そっぴやおめーも部活だよな。悪かったな突然」

「そんな面と向かってお前に気を遣われると逆に怖いな」

「面は向かってねーし。んじゃな」

平次のからかいにコナンは、再び俺様調に戻って電話を切ってしまった。

音信不通の音が流れる携帯を、耳を離してまじまじと見てから平

次は苦笑して、電源ボタンを押した。

学生かばんと竹刀袋を持って立ち上がる。

そして、何気なく窓を見た。

青空は、一点の曇りも無く。

思わず目を細めた。

コナンが、いつもの事件よりも慎重に慎重に推理していた理由が、平次にはなんとなくわかる。

コナン、いや工藤新一と毛利蘭は真実だと一緒に居るのに事実だと一緒に居ない。

そんな矛盾が、高木と昔死んだ想い人とのすれ違いにどこかダブって見えてしまったのだらう。

万に一つ、彼らにそんな悲劇が訪れるとは思っていないし、ありえないことだが。

信じている。

それこそが悲劇を起こさないたった一つの方法。

だが。

信じてはいるが、信じて良いのは「どこまで」だらうか。

表面的にも、内面的にも。

全てを信じるが良いとは、平次自身思えなかった。

「まあ、それこそ人それぞれの空があるやろっしな」

自分の頭上にある晴天がそのまま東京の彼の頭上にあるわけではない。

勿論、本店の刑事たちの上の空も少しずつ違っただらう。

そう感じると、不意に自分の幼馴染から借りた人気若手女優兼歌手のバラードが頭によぎった。

彼女から熱いプッシュをされて渡されたアルバムの中に入っており、聞き流す程度に耳に入れた程度だったが。

今なら、聞き流すほうが難しそうだ。

彼は自然とその曲のフレーズを口ずさみ、カーテンを閉める。

東京の名探偵とは違い、鼻歌するくらいなら抵抗は無い。

そして、彼も彼自身の空の下に向かうべく部屋を出た。

いつかは いつかは

あなたに会いたい

いつかは いつかは

背中を向けても

いつかは いつかは

運命のように

記憶のその先に

新しい空がある

七日目、ⅠⅠ

入り口の警備員に会釈しながら、高木は警視庁から出てきた。歩いていくと、体全体が固まっている感覚を覚える。

先ほどまで、深夜逮捕した斉藤の事情聴取に付き合っていたためだ。

当事者とも言える彼は、直接聴取に参加することは無かったが、白鳥が斉藤に聞いていくのを窓越しに眺めていた。様々な思いを、抱きながら。

——このままのほうが、いいのだろうか

そんな疑問を持ちつつ彼は階段を降りた。

斉藤の供述する様子を眺めている最中、ずっと自分自身に問うていたが、未だに答えが出ない。

この疑問は誰にも言っていない。

狂言自殺から逮捕まで、容疑者達に悟られぬよう都内の某所でじっとしていた。

その間に出てきた疑問である。

雲を掴むような推理に、頭を抱えなくなる。

だが、これは自分で答えを見つけ出さないといけないような気がして、小さく足元に向かつてため息をついた。

そして凝り固まった肩を回して前を向けば、目の前には警視庁きつての敏腕刑事・佐藤の姿があった。

複雑な心中が自然と和ぐ。

急ぎ足で彼女の元へ寄った。

「お疲れ様」

「佐藤さんもお疲れ様です。もしかして僕を待っていたんですか」

「ええ。犯人逮捕するまで結局まともに話せなかったし、ちゃんと会いたいなあつて」

あの投身自殺の狂言から斉藤逮捕までの間、二人きりで会う余裕が無いほど捜査一課は忙しなかった。

彼女にそう言われて、こうやって面と向かって話すのは久しぶりだと彼は感じた。

だからこそ自分も、彼女に電話すべく警視庁から出てきたのだ。中で電話すれば、他の先輩刑事達のいろんな意味で怖い目が気になってしまうから。

佐藤に促され、二人で近くの広場まで行く。

そこでペットボトルのお茶を渡された。

「そういえば、先輩達からのあつついお灸はもう終わったの？」

彼女も自分の分のお茶を持っており先に蓋を開けて飲む。

高木は若干顔を引きつらせた。

「何とか。暫く閉所恐怖症になりそうですよ、僕……」

「あはは。でも怒られるなら私も怒られたっていいのにね」

「そりゃあ先輩も佐藤さんを怒ることは出来ませんよ」

彼は許可を取ったとはいえ、所轄内で暴拳に出たことに対して先輩刑事たちからみっちり絞られた。

何時間も取調室でずつと。

そこには後輩を思うが故、という最もな理由もあっただろうが、それ以上に「よくもだましたな」という殺気がすごすぎて、高木は終始冷や汗を流しっぱなしだった。

そんなつい数日前の地獄絵図を思い出し、苦笑しながらペットボトルの蓋を開ける。

三口ほど喉に流し込むと、口内に残っていた取調室の煙草の煙がなくなるのを感じた。

さっきまでいた取調室近くでもらってしまったものだ。

自分が吸わなくても副流煙と言うものがあることに、先輩達も気付いて欲しいと思わなくも無い。

「煙草はダメ、絶対ダメ」みたいな、どこかで聞いたようなフレーズのポスターでもこっそり貼ってやろうかと内心思いながら、もう一口飲む。

そこまで考えて、何故自分が佐藤に電話しようとしたのか思い出し、慌てて蓋を閉めた。

そして佐藤の目の前にしゃきつと立った。

彼女はきょんととして彼を見つめる。

「佐藤さん」

「何？」

「その屋上の件では、佐藤さんにもご迷惑をおかけしました。すみませんでした」

謝罪とともに深々と頭を下げる。

それに対して、一瞬拍子が抜けたように佐藤は目を丸くする。

しかし次にぷつと吹き出した。

「何今さら言ってるのよ。私は別に迷惑してないわ。信じてたもの」

その言葉に、下げていた頭を元に戻した。

「この前も雪乃さんのことを黙ってて謝っていたけど、そんなことで私はあなたを怒ったりしないし、嫌いになるわけじゃ決して無い」

彼女は若干照れつつ、平日の昼まで人もまばらな広場でぼつりぼ

つり言葉をつむぐ。

それを高木は神妙に聞く。

「あなたが何をしても、信じてるから。あの時も、あなたが犯人じやないってわかってたし、あの行動が犯人を追い詰めるための狂言だって直感したから」

そこで一拍おき、佐藤は高木を見上げた。

「あなたが屋上から落ちたとき、わかったの。ああそうか、そういうことだったのかって」

彼女の意図がわからず、彼はえ、と呟いたが、この言葉にはまだ続きがある。

「あなたが六年前、雪乃さんが落ちた時に感じた気持ちも、こんな風だったのになってことよ」

彼が血しぶきと共に屋上から落下したとき。

彼女はコンクリートの床にへたれ込んでしまった。

「嘘だとわかっていたのに、ものすごい喪失感に襲われたわ。まるで、自分の世界から太陽が落つこちたような、空に大きな穴が空いたような。——でもね」

泣いてしまいそうな顔で、佐藤が笑う。

「太陽が落ちても空に穴が空いても、あなたを想う気持ちは変わらないから自分を支えることが出来たのよ」

急に胸が締め付けられる感覚を覚えて、高木は知った。六年前の自分と、今の目の前の彼女の決定的な違いを。

同じように想い人が銃で死んで、同じように落下したのに、彼女がここまで強く在れたのは、過去の自分には無いものがあつたからだろう。

それは、「信じる」を越えた、更に上の。

「ありがとうございます」

悟った高木は無意識のうちに、柔らかい表情でお礼を言っていた。笑ってはない。

だが、今まで佐藤が見た中では一番穏やかな。彼女もそれに気付いて、もう一度笑った。

そうして、暫く広場で静かにお茶を飲んだ。

最近感じることの無かった緩やかなひととき。

二人とも飲み終わると、高木は広場の時計台を見上げた。

正午近く。

ちょうど昼食時間だということを確認して、彼はペットボトルをゴミ箱に捨てた。

——やっぱり行くか

彼女に会うまで迷っていたが、彼はこの会話で答えを見つけた。た。

その内心の決意が、引き締まった顔つきに表れる。

佐藤がそれを察して、手に持っていたそれを同様に捨てた。

ゴミ箱を離れると、高木の隣に立ち、彼を見上げる。

「どこかへ行きたいなら、送ってってあげるわよ」

自分の気持ちを先回りするかのような台詞に、彼は少し驚いた。
だが次に困ったような笑顔を浮かべる。
久しぶりに見た、と佐藤は思う。

「お見通しでしたか」

「いいえ。ただ、どこかに行く感じだったから。それも、捜査でね」
頭をぼりぼりかきつつ、高木は空を見上げた。

「佐藤さんには適わないですね」

だからこそ、これから行く決意が出来たわけだが。

七日目、IIII

正午過ぎ、西野誠司は昼食を取るべく病院から出た。

近くのコンビニで弁当を買ったためだ。

いつもは病院内の食堂で食べるのだが、あの事件以来あまり人の集まる場所に行きたくなかった。

ガードレールに沿って歩くと、向こうから同じ精神科のベテラン看護師がやってきた。

手に持つ袋を見て、コンビニ限定のジュースを買いに行っていたことがわかる。

まだまだ新米の駆け出し医師である西野は、先に会釈をする。

「お疲れ様です」

「あら、西野先生お疲れ様。さっき電話があつて昼一番の相田さんがまたキャンセルだそうですよ」

「わかりました、じゃあ飛び込みの患者さんが居たらすぐに回してくれて構わないんで」

よくドタキャンする患者が何名か居るが、相田もその一人だ。

いつものことだと苦笑して、そのまま看護師とすれ違つと、数秒してから背後に声がかかった。

「せっかくだから、今日の休憩はちょっとゆつくりしたらどうです？ やっぱり先生痩せたわよ」

その言葉に、振り返つてもう一度お辞儀をすると、西野は「ありがとうございます、でも大丈夫です」とお礼を言つてきびすを返した。

そして何かを振り払うべく、右肘をぐるりと回し円を描いた。

どうも、あの事件以来人の厚意の受け止め方を忘れてしまったような気がするのだ。

十分ほどして、ざるそばと麦茶を買って、来た道を戻る。

病院が視界に入ると同時に、入り口付近で携帯電話片手に話している金髪の外人を見つける。

英語で「まだ目を覚まさない？」などと言っているのが、米国帰りの西野に聞こえた。

彼女は最近病院でよく見かける顔である。

結構な美女だから覚えていたのだが、日本人の彼氏かなんかが入院してるだろうかと勝手に想像して、その側を通り過ぎていく。

——そういえば涉さんの今の彼女も美人だったなあ

自分の背後に小さくなっていく金髪美女とは又違う美人だったが、確か佐藤という名前だったはずだ。

黒髪のショートカットに綺麗な顔立ちの女性であるのを思い出す。

数日前、そんな彼女に六年前のことを話した。

その後、彼女は高木と一芝居打って斉藤を追い詰めている。

自分の言葉がどれだけ彼女に影響を与えたのかはわからないが、少しくらいは与えて「しまっている」自覚が西野にはあった。

とぼとぼ、という擬音が当てはまる足取りでゆっくりと入り口に近づく。

中に入る前、ため息を一つついて、空を見上げた。

痛いくらいの明るさが胸を苦しめた。

先日的事件も、六年前の事件も、同じ空が見下ろしている。

それがどうしようもなく、彼を苛んだ。

しかし、それを甘んじて暫くの間受け止める。

そして次に前に向き直ったとき、彼はさっきまで無かったものを

突如目にした。

驚きはしない。

だが、諦めにも似た安堵感が彼の全身を包んだ。

「やあ」

ベージュのスーツを着た西野の先輩、高木渉は中から右手を上げてにこやかに笑いかけた。

西野が立ち止まったまま中に入ってこないままでいると、高木は自ら外に出てきた。

「何度も昼食中に悪いな」

昔と変わらぬ態度で気さくに言うと、西野は肩をすくめる。

「別にいいですよ。――で、どうしたんですか」

この問いにすぐには答えず、彼は辺りをちらりと見回した。
丁度昼食時で人通りは多い。

それを気にして、黙ったまま入り口から離れて庭へ向かう。
西野もその後ろに黙って従う。

以前聴取の時には使ったベンチまで行き、人もまばらなのを確認してから、やっと高木は口を開いた。

「今時間は大丈夫か」

時計を見てあと数十分、と西野は答えようとしたが、さつき看護師から言われた言葉を思い出し「暫くは大丈夫です」と返した。
すると、高木は少し詰まり、しかしすぐに、そうかと頷いた。
ここで短時間と言われれば、帰ろうかと思っていたからだ。

「でもあまり時間取らせるのも悪いし、単刀直入に言うよ」
「助かります」

二人ともベンチに座らず、立ったまま向き合う。
のんびり座っていられる心境ではなかった。

そんな状況を作った高木は、一度天を仰いでから視線を真っ直ぐに
戻して切り出した。

「直が起こした、事件についてなんだけど」

西野は表情を動かさない。

高木は気にすることなく続ける。

「実はどうしても気になることが一つだけ残っているんだ」

そこで後輩は怪訝な顔を見せた。

「直さんは全部自供したんですよね」

なのに、気になることが？ と、暗に聞き返してくるので、彼は首を縦に振る。

「ああ、直は全部話したと思うよ」

”直は”、つまり犯人の斉藤直以外で気にかかっていることがあるわけで。

「あいつはもう開き直って全てを話したよ。だからこそ疑問点が出てきたんだ」

「疑問点？」

「いや、疑問自体は、直を逮捕するまで身を潜めていた間に思いついていたんだけどな。その疑問がはつきりと形になったのが直の自供を聞いてからだった」

「なるほど。じゃあどういった疑問何ですか、それは」

単刀直入を言ったにも関わらず、外堀を埋めていくような話しぶりに、西野は急かすことはなかったが、ゆったりとした口調で問う。それに合わせるかのごとく、高木は一呼吸置いて、今度こそ核心を述べた。

「”どうして須地は六年前の真相に気付いたのか”」

新米医師は右眉だけを眉間に寄せた。

「今回の事件は、須地が六年前のことで直を強請ったのが始まりだ。じゃあその始まりの始まりである、須地が六年前の真相に気付いたきっかけは何だったのか」

頭の中を整理するように、高木はベンチの周りを歩き始める。

「ふとした拍子だったかもしれない。単なる偶然だったかもしれない。……でも、六年経った今になってやって来た”偶然”を偶然で済ませるには少し安直過ぎる」

事実を並べ組み立てていく姿は、彼にしては珍しく刑事らしかった。

目暮あたりが見ていたら目を細めそうな光景だ。

しかし本人は無意識の行動だった。

そしてこちらは無意識のうちに、西野が両拳を徐々に握り締めている。

「しかも、直の自供によれば、俺に彼女がいることを知ったのは、須地経由らしい」

脅迫文に斉藤が載せた「この前、お前が女と歩いているところを見た。彼女かい？」という一文は、彼自身が高木と佐藤を見たからではなかったという。

須地から伝わったものだと言っていた。

「なんで六年前からずっと連絡を取り合っていない須地が、俺と佐

藤さんのことを知っていたのかも疑問になった」

西野の背後数メートルに行き着いたところで、高木は止まった。
彼は、まだ何も言わない。

「それも偶然だったんだろうか。どこかの道端で俺たちが仲良く話しているのを見たんだろうか。偶然、俺たちを見かけて、偶然、六年前の真相にも気付いたんだろうか？」

黙ったままの後輩の背中に向かって、彼は続ける。

「でも」

そして否定単語を加え、

「その偶然に何かが介入すれば、全ては偶然ではなく必然となる」

真っ白になるほど握り締められていた西野の拳が、やんわりと開かれた。

「佐藤さんから聞いたよ。雪乃が死んだときの俺の放心状態に、彼女の殺人でショックを受けたのではなく自殺したことにショックを受けたんじゃないか、って言ったそうだな」

この病院にくる間に、彼女から教えてもらったこの言葉。
今から考えると、確かに高木は雪乃の殺人によるショックは無かった。

なぜなら雪乃は殺していないからだ。

自殺したのは、事実だった。
つまり真相全体を見渡せば、西野が佐藤に言った見解はある意味正しかった。

「ついでに俺は、お前にだけ彼女が出来たことを伝えた」

雪乃が死んでからずっと高木のことを心配していた彼だったからこそ、佐藤と恋仲になったときは素直に教えた。

「……そしてお前は、俺とは違い他のゼミ生達とも連絡を取り合っていた」

FBIすらわからなかった真相に、なぜ須地は気付いたのか。
狂言自殺から逮捕まで、容疑者達に悟られぬよう都内の某所で高木はじっとしていた。

その間に、この疑問に気付いてしまったのだ。
気付いたことに後悔はしていないが、戸惑いはあった。
それを打ち消してここまでやって来た。
後戻りは、出来ない。

大型トラック数台が連なって病院前の道路を走ったせいで、いっせいに小鳥が庭から飛び立つ。
騒がしいエンジン音と細やかなさえずり。
相反する二つの振動が二人周りを覆う。
鳥の羽が一枚、芝生に落ちた。

そして。

震えそうな声を何とか正して高木は言った。

「西野、お前が須地に言ったんだな。——お前は、ずっと前から真相に気付いていたから」

偶然を必然にした本人が振り向いた。

高木に出会ったときと同じ、諦めと安堵感を持ったまま。
その目に優しい光を秘めながら。

西野誠司は悲しそうに笑った。

七日目、I V

高木は西野に促され、そのまま病院の屋上にやって来た。自販機も何も無いところなので、人はいなかった。

申し訳程度に、そこにも庭と同じベンチが設置されているだけだ。今度は二人とも腰を下ろした。

お互いに、ベンチの端と端に。沈黙を保ったまま。

目の前には、高層マンションのてっぺんの切れ端と青空だけが映る。

風を切る音が屋上に鳴り響く。

西野の白衣がはためいた。

「俺を恨みますか」

庭で須地を誘導したのではと問われた後、ずっと黙ったままだった彼は、そこでやっと口を開いた。

ぼつりと出てきた言葉は、自分が須地に言ったと認めたも同然のもので。

だが高木はあまり驚くことも無く、かぶりを振った。

「いや。でも、どうして俺ではなく須地に言ったのかが気になるよ」

二人は揃ってフェンスを越えた向こうの雲を見つめた。

顔は合わない。

「須地さんは政治家秘書だったけど、どうもギャンブルに興味があるようだったんです。でも仕事で得た金を使うことは、世間体を考えれば出来ない。だから影の金が欲しかった。……そこで、影の金を得るための手段を作ってあげたんですよ」

この空の色とは不似合いな、人間の奥底をあぶり出した方法を、西野は淡々と述べる。

「それに、六年前の証拠が無い以上、自ら出てきて自らふたたび犯罪を起こしてもらうしか、直さんを捕まえる方法は無かった」

それはそうである。

今思えば、斉藤直は黙っていれば六年前の事件の罪を警察で問われることは無かったのだ。

たとえ西野が真相に気付いたとしても。

証拠は無いから。

須地に脅されふたたび殺人を起こしたからこそ、斉藤は手錠をかけられる羽目になった。

西野は段々俯いていく。

そしてその顔を右手で覆った。

「すみません。俺、須地さんが直さんに殺されるかもしれないってわかってて、彼に真相を話しました。……涉さんに今彼女が居ることも。須地さんから直さんにそれが伝わって涉さんをはめようとするんじゃないかってことも。全部、わかってました」

高木は彼のほうに視線を向けず、ただ眉間にしわを寄せる。

「でも、」

彼は恐る恐ると言った風に、顔から手をどけた。

「俺は、どうしてもあのままにしておきたくなかった」

彼の口調が弱弱しく、語尾がかすれるように薄まった。

「あなたと雪乃さんが幸せになればいいって本当に思っていたから」

彼は留学してきた当初、知らぬ国と母国語と違う言葉に気圧され精神的に追い詰められた。

それを救ったのが高木と雪乃だった。

一人になろうとする彼を半ば無理やりゼミに引き込み、飲み会に誘い、友人になってくれた。

だから、だから、

「あなたたちは、俺にとつての太陽でした」

須地が斉藤を脅しても、須地が彼に殺されても、巻き添えに同じゼミ生が死んだとしても。

更には、己すら殺される対象になったとしても。
全ては太陽のために。

ある種の盲目的な信仰に、高木は目をつぶった。

何かに耐えるような、苦しそうな眉間で。

数分ほど、どちらも言葉を発しなかったが、高木がゆっくりと瞼を開けた。

「それは買い被りすぎだよ」

そう言って深く息を吐いた。

両手を組み俯いたままの彼を労わるような声だった。

「でも、そこまで思っていてくれながら、なんで六年前の時点で言わなかったんだ？ 当時真相に気付いていて、すぐに警察に言っていれば直も捕まったはずだろう」

咎めはしない。

優しい口調で高木は聞く。

何を思ったのか、西野は答えないまま意を決したように顔を上げ、立ち上がった。

思わず高木も彼に視線を移したが、立ち上がりはしなかった。逃げることは無いとわかっていているからだ。

西野がおもむろにズボンのポケットに手を入れる。

そして、透明のビニール袋に入った小さな「それ」をベンチに座る高木の前にかざした。

問いの答えが、これだといわんばかりに。

その答えに高木は、流石に驚いた。目を見開いて後輩を見上げる。

だってそれは、どれだけプロが探しても見つけ出すことの出来なかった――

「六年前、雪乃さんが撃った弾丸です。……六年前、これを所轄の近くで見つけて拾ってしまったことが、俺の行動の全ての原因でした」

最終話

「なんで、警察に渡さなかったんだ」

高木は、FBIが血眼になって探していたのを思い出す。

どうやっても見つからなくて、この事件は目に見えぬいわゆる祟りに近いものがあるのではと当時恐れられた。

そのたたりの元凶が今、目の前にある。

六年間それを隠してきた西野は言う。

「これがあれば、いつでもこの事件を動かせると思ったからです」
「動かす？」

つい先ほどすみませんと謝っていた彼からは、想像しにくい目つきになった。

憎悪と悲しみと慈しみと。

そんな相反する感情が彼の瞳の中で移り変わり出てくる。

「ええ。もし当時俺が警察に弾丸を渡しついでに真相を話したら直さんは捕まったでしょう。そして自分のせいで雪乃さんが死んだと知った高木さんは、より傷つき後悔しもしかしたら壊れたかもしれない。全部があつという間に、あらゆる意味で終わってしまったでしょう」

それでは納得がいかなかったと彼は言う。

弾丸を警察署近辺で見つけたときの記憶は、今でも消えない。

雪乃の最期の言葉、弱い自分でごめんねという台詞で真相はだいたいわかってしまっていた。

他の人には見極められないだろうが、高木の様子を自分が見る限

り、雪乃は教授を殺していない。

でも雪乃は殺したと言つて自殺した。

つまり、教授の脅しに断りきれない弱い彼女のせいで高木が犯行に及んだと、誰かから吹き込まれたということ。

その誰かとは、恐らく死ぬ直前に一緒に居た斉藤直。

でも、皆精神が不安定な今、これを言えばどうなるだろうか。

そんな風に迷いながら彼女が死んだ場所をさまよっていたら、草陰で見つけてしまった。

血がこびりついた褐色の鉛。

昨日の強風で、どこから出てきたのかもしれない。

触つてみるとざらついていて、思ったより重かった。

呆然と眺めているうちに、段々震えてきた。

警察ではなく自分が拾つてしまったという事実。

自分がこれをもつことで、何ができるだろうか。

気がつけば西野はそれを持ったまま寮へ向かつて走っていた。駆けている間涙が止まらなかった。

そうだ。

一度、この事件を止まらせよう。

そしていつか必ず、よみがえらせるのだ。

自分の太陽の幸せを奪つた斉藤直に絶望を与え、太陽である高木には万全の精神状態になつてから真実を伝えよう。

間違つた誘いで死んだ雪乃も、それでやっと報われるはずだ。真相とともにこの弾丸があれば、いつでも事件を動かせる。

そう強く心に刻み、泣きながら彼女の撃つた弾丸を握り締めていた。

「……だから俺が佐藤さんと付き合い始めた今、事件をふたたびよみがえらせたのか」

事実の確認しか、今の高木には出来なかった。

雪乃が死んだ当時、無意識に彼女が殺人を起こしてはいない、でも死んだ、ということ悟っておきながら、受け入れられなかった自分。

そんな自分を一步離れたところから見守っていた西野。

その青年の悲しみがどれほどのものだったのか。

彼には図りかねた。

「ええ。付き合うと知らせてくれた涉さんの顔は晴れ晴れとした感じでしたし。これなら、もう大丈夫だと思います」

どれだけきつい事実が出てこようと、側で付き添ってくれる人があるなら壊れないだろう。

これが真実だったのだ。

六年後の今になって事件が起こったのは、斉藤の自滅のせいではない。

須地が斉藤を脅したせいでもない、真相を知ったからでもない。

更に言えば、西野のせいでもないかもしれない。

本当は、高木が佐藤という一生の人を見つけたからだった。

つまるところ、全てが自分に帰ってくる事実、高木は苦笑した。

脱力したように、肩を落とす。

「それでも、自分の意思で動いているつもりだったけど……全部お前の手のひらの上だったようだな」

「そんなことないですよ。思ったより直さんが執念深かったせいで、異常な殺人になったのは計算外でしたし。そこに輪をかけて涉さん

の行動力や、刑事らしいっていうんですかね。とにかく過去のあなたよりもずっと強くて遠い人になっていて、内心舌巻いていたんですから」

その言葉に、二人はお互いに少しだけ笑った。

自分達の六年間を呆れるように。

ほんの少しだけ。

それから不意に沈黙が訪れる。

聞くことは聞いたし、言うことは言った。

そんなやり切った思いから降ってきた沈黙だった。

西野は何とはなしに頭上を流れる雲を見上げる。

いつの間にか通っていたらしい飛行機が、細々と白い点線を描いていた。

その点線も、徐々に薄く薄く消えていく。

早く無くなる雲もあれば、粘ってうつすらと残そうとする雲もある。

それでも最後は青色に溶け込んだ。

ぼんやり眺めた後、西野は視線を元に戻した。

「全ては終わりました。……これを、あなたにお渡しします」

袋に入ったままの弾丸を、西野は差し出した。

真相もわかった。犯人も捕まった。

あとは弾丸を見つけたらおしまい。

それがわかつている高木は、神妙な面持ちで受け取り、暫く見つけた。

次に袋の口を開けたかと思うと、まだ若干赤みがあった弾丸をおもむろに取り出した。

「涉さん？」

西野が怪訝な顔をする側で立ち上がり、屋上のフェンスまで歩み寄る。

そして。

「なっ……」

思わず西野は口をあけた。

目の前で高木がその弾丸を屋上からフェンスを越えるように投げたのだ。

一瞬鉛が空を舞った後、それは庭を流れる川のほうに消えていった。

西野が呆然としてみると、高木は投げた姿勢を正してこう言った。

「空に撃ったことにしよう」

「え」

「あれが無かったら、事件は終わらないんだろう?」

西野は自分の理屈で返されてはつとする。

「でも、」

それでもやはり事件は終わったんじゃないか。
事実、教授が死んだ。雪乃が死んだ。須地が死んだ。香川が死んだ。梨本が死んだ。

そして斉藤は捕まった。

それを仕組んだ自分は高木によって明かされた。
これ以上、何をするというのだ。

言葉にせずとも西野の意見は高木に通じたのか、彼は困ったように笑った。

「多分、これで終わりとするなら、それは無理やり終わらせたことになると思うんだ」

白衣をはためかせながら、西野はつまった。
心を見透かされた気分だったからだ。

「雪乃の死に顔は、顔と呼べないほどになっていたけど、どこか安らかだった。それはあいつが、ずっと人を想い続けていたからだと思っ」

誰よりも優しい笑顔で、彼女はいつも周囲を和ませていた。
だからこそ、と高木は「元彼」として続けた。

「あいつの想いは、弾丸一つで終わるようなもんじゃないよ」

彼の誇ったような言葉つられ、西野は頬を緩めた。

「やっぱすごいっすねあなたも雪乃さんも」

西野は、高木の言いたいことがなんとなくわかった。
空に撃ったという意味も。

自分に撃ったわけでも、誰か別の人を撃ったわけでもなく。
空に向かって撃つ。

彼女の願いを込めた弾丸は、天高くずっとずっと落ちないのだ。

「敵おうと思ったこと無いけれど、それでもやっぱり敵わない」
「だからお前は買いかぶりすぎだよ」

「そんなことないっすよ。俺には考えもつかない。……終わらせないほうがいいものがあるなんて、知らなかった」

西野は頬を緩めたものの完全に笑うことは無かった。

高木からきびすを返す。

向かう先は、下へと続く階段だ。

「あの女刑事さんと、幸せになってください」

背中ですういい、扉のノブに手をつける。

すると、高木もその背中に向かって言った。

「——死ぬなよ」

ノブを回す手が止まった。

そして彼の肩が少しだけ震える。

「全部お見通しっすか」

会話の内容とはあまり合わぬ明るい声で、振り向かないまま西野は今度こそ笑った。

「そんなわけじゃない。……ただ、お前が幸せにならないと雪乃も悲しむよ」

「ありがとう、ございます。でも大丈夫っすよ。さっきの会話で思い直しましたから」

震える肩に力が入ったように高木には見えだが、そのまま西野が下へと消えていくのを黙って見送った。

しばらくしてから、弾丸を投げたほうに顔を向け、天を仰ぐ。

薫風が頭上を吹きぬけ、彼は少しだけ目をつぶった。
目頭が熱くなったが、不思議と涙は出なかった。

高木もあとから屋上を出て、駐車場に行くと、自分を支えてくれる女性が待っていた。

車に背中をもたれかけて、佐藤は手を振っている。
すぐに駆け寄ろうとしたが、それは彼女の声で止まった。

「ねえ、東都タワーの爆破事件覚えてる？」

澄み切った笑顔で、いくらか離れている彼に向かって声高に言っ

た。

屋上の一件については何も聞かない。

その代わり脈絡の無い質問が飛んだが、高木は穏やかに返す。

「ええ、覚えてますよ」

「じゃあさ、あの時私を止めてくれたことも？」

「それは勿論」

佐藤が昔の想い人を殺した犯人を撃とうとして、高木が体を張って静止した。

自分が彼女とやっとのことで想いを確かめた印象深い事件だ。それは彼女にとっても同じことが言える。

「あの時ね、高木君本当は何を止めたかったの？」

思いもよらぬ質問に、少しだけ彼は目を丸くした。

だが、雪乃のことを被らせて、彼女が何を言いたいのかはすぐにわかった。

高木は迷うことなく、答える。

「俺の我侭です」

「わがまま？」

今度は佐藤が驚く。

「止めたのは手段であって目的ではないです。あなたがどれだけあの時犯人を撃ちたかったとしても、俺には関係なかった。俺があなたに後で後悔してほしくないと思ったから、止めたんです」

雪乃とは又違う種類の、責任感や正義感の強い彼女のことだ。
一時的な激情に流されて人を撃てば必ず後悔する。
高木はあの時そう直感したのだ。

「それって我俣？」

「はい、我俣です」

堂々と答える彼に、佐藤は噴き出した。
そして早く来いと手招きする。

「あーあ、もうちょっと困らせたかったのになあ」

近くまで足早になると、彼女は残念といわんばかりに肩をすくめた。

「何ですそれ」

「いいのよ、高木君がそれだけ強くなっただけのことだから」

「それは佐藤さんのおかげですよ」

「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない」

佐藤は冗談交じりに、強めに彼の背中を叩いた。

痛いじゃないですか、と笑いながら高木は運転席のドアを開けた。
行きは彼女に運転してもらったから、帰りは自分で運転するとい
う。

佐藤も大人しく助手席に座る。

何せこれは自分のアンフィニではなく彼の車だ。

「スカイライン、か。このお天気に良く合う名前だわ」
「そうですね」

そして彼らは非日常的な日常へと、車を走らせた。

天気は快晴。

時は昼。

どこまでも高い空は、どんな想いの上にも、ずっとずっと広がっている。

空に向かって、撃つ／完

最終話（後書き）

長い間本当にありがとうございました。
あと一話を使って後書きを書かせていただきます。

後書き

ここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございました。
「空に向かつて、撃つ」何とか終わらせることが出来ました。

連載中後書きを書かなかった分、書きたいことが溜まりに溜まったので（笑）この場を借りて少しだけ書かせていただきます。

あと、こちらの連載に全力を注いだ分他の作品の評価レスが停滞しておりまして。

失礼いたしました。これから徐々にさせていただきます。

高佐の長い話ってあまり見かけないなー、高佐ファン増えて欲しいなー、と思ったのがこの話のきっかけでした。

高佐好きの高木好きなので主役は高木、佐藤は側で支える人。

でも二人だけだと話が進みにくいからコナンも参戦。

更に私の趣味として（爆）平次も顔をひょっこり出させて。

ついでに刑事らしく銃とかも出てきたら面白いかもという安直な思いつきで、大元のネタはできあがりました。

あとは雪乃と同じ展開で高木が投身するところと、そんな高木に銃をかざす佐藤を一番書きたい場面にして、それを目指して連載を書き始めました。

私としては、これを最初から推理として書いているつもりはなかったです。

恋愛でもサスペンスでもないですけど、あえて言うならそれこそ二次創作を書いているつもりでした。

でも出来上がりを見ると、半分推理半分は……漫画みたいなのを書いたのかなと思います。

書きたいものを全部書いたら、結構間延びしてしまった感が否め

ません（苦笑）

特に七日目は本編として書くのではなく、エピソードとして入れたほうが間延びするイメージが少しはマシになったんじゃないだろうかと今になって思います。

でも、書き直さず教訓として残しておきます；

必要なことを書いたつもりなのに、間延びしたということは私の力不足だと思います。

またこれから推理ものを書く機会があれば、リベンジしたいです。

構想から執筆、修正と半年くらいかかってしまいました。

音楽聴きまくって長い間つらつらと。

その割りに出来上がったものは…いえ、もう何も言いません腹にくります（爆）

オリキャラについてももう少し。

私にしては珍しく、ていうかFFとしてまともに書いたのは初めてです。

オリジナルの話はこれまでも少しは書いていたので、その教訓としてわかりやすい特徴をそれぞれのキャラにつけようと思いました。その中で雪乃は意図的に詳しい描写をしていません。

佐藤ほど美人ではないけれど、雰囲気美人の人、というイメージだけ持っていただけたら。

斉藤は書けば書くほど情けない人になったので、この男が捕まって終わりでは少し釈然としないなと思っていました。（酷）

そこでもう少し話をつきつめていくと、西野が何かしでかしててもおかしくないと気付いたので、最終的なある意味真犯人は西野になりました。

そつえば、オリキャラではないですけど千葉の存在感がもはや空気になってました（汗）

ついでに、最後らへん高木が別人になりかけて冷や汗かきました。

一応、「僕」と「俺」の使い分けは意図を持っていますが、どうも不安になってきたのでこれから見直します（苦笑）

文法なども、時間があれば修正はしていきたいと思います。

恐らくこれまで書いた中では一番色々ツツコミどころの多い連載となりましたが、ずっと読み続けてくださった方々、粘り強く読んでくださった方々、本当にありがとうございます。

長期連載はもうしないかもしれませんが、短編も今のところ予定はないのですが、急に書きたくなって投稿することはあると思います。

その際は、また足を運んでくだされば幸いです。

本当に本当にありがとうございます。

2008/9/15
yoshina

執筆の主なお供：

「SINGLE BEST」柴咲コウ、「HEART STATI
ON」宇多田ヒカル、「AND I LOVE YOU」DREA
MS COME TRUE、「DIAMOND WAVE」倉木麻
衣、「PLEASURE」「TREASURE」B'z、「Do
the Best」DoAsInfinity、ZOIDSサント
ラ、るろうに剣心星霜編サントラ、名探偵コナンサントラ、米倉千
尋の曲諸々、遊戯王DM DUEL VOCAL BEST、TW
O-MIXの曲諸々、「IWGP CLASSIC EDITIO
N」、「CLASSICAL EVER!」、「exclusiv
e selection」Steve Reich、ニコ動（笑）
で一杯諸々とetc./ /

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7666e/>

空に向かって、撃つ

2010年10月12日16時02分発行